

るに、アメリカ艦隊のフィリッピン移駐といふことは、今のところ先づ空想に類するものだといはなければならぬ。

最後において、今一つの難點を言へば、フィリッピン群島そのものの位置があまりに我が重要な戦略地點に接近しすぎてゐるため、アメリカの主力艦隊が居るべき根據地としては、むしろ不適當だといふことだ。

更めて地圖を開いて見るまでもなく、ルズン島の北方近く臺灣島があり、その西方稍遠く海南島がある。しかも、日本の前哨地點ともいふべき新南群島は、これをその正面から監視する地位に置かれてゐるから、カウイテまたはオロンガボーにおけるアメリカ艦隊は、絶えず敵によつてその行動を偵知されるのみならず、自己の沿岸または近海を航行するやうな場合でも、ことごとくその機密と自由とを妨げられ、まかり間違ふと、時には非常な危険にさへ遭遇する虞れがある。しかも、それらの根據地と、日本本土の心臓部とのあひだには、尙ほ一千五百海里乃至一千七百海里の距離が存在し、そこに至るには、當然臺灣

ルズン島の位置

海峡またはバシー海峡の險を突破する必要があるから、いはゆる近距離封鎖を行はうとすれば、多くの場合、身を挺して死地に飛び込むだけの覺悟をしなければならぬ。さすれば、それによつて得るところが、果してよくそれによつて喪ふところを償ひ得るかどうか、思ふに多大の疑問が存するところであらう。

殊に、フィリッピンにおけるアメリカ海軍の根據地は、日本の領土または領土に准すべき重要な戦略地點に接近して存在してゐるから、それはいづれも敵の空襲下に曝され易い立場に置かれ、そこに錨泊してゐる艦隊は、絶えず非常な不安を感じなければならぬ。

なぜなれば、臺灣の南端高雄からマニラまでの距離は、約九百五十キロに過ぎず、海南島の東端萬寧縣治からマニラまでの距離は、約千二百キロに過ぎないから、我が空軍は、優にこれらの根據地を爆撃し得ることになつてゐる。

このたびのヨーロッパ戦争において、北海沿岸に存在する英國の海軍根據地が、いづれもその軍事的價値を喪失し、有名なスカパ・フローやクロマーチーナ

フィリッピンと日本の距離

ども、今ではあまり多く利用されて居らないのは、それが比較的ヨーロッパ大陸に近く存在してゐるため、絶えずドイツ空軍の脅威を蒙る虞れがあるからで、さういふ點から見ると、マニラやオロンガポーなども、多くスカバ・フローやクロマーチーなどと選ぶところはない。

さすれば、アメリカの思惑通り、その全艦隊を一先づ布哇に集中し、これをして直接日本の近海に進攻せしめ、日本艦隊を一舉に撃滅して、さらにフィリッピンまたはその他の地點に根據地を得、そこを基地として日本に對する近距離封鎖を行ひ、それと同時に、絶えず日本の國土を空襲し、徐ろに日本の降服を待つといふ方法は、結局一種の空想または夢想ともいふべきもので、到底實現の可能性はないことになる。

果して然らば、アメリカの執るべき實際上の手段は何であるか。以下章を更めて、私はそれに對する卑見を述べて見よう。

日本の近海に艦隊の封鎖は夢想

第九 對日封鎖の夢

愉快な樂天論

アメリカの思惑通り理想的な戦法をとることが以來ないものとしたら、アメリカは勢ひ他の手段をとらなければならぬ。それに對して、アメリカの軍事問題研究家などは、果してどういふ風に考へてゐるか。

今日までに多くの人々が、それについて種々論じてゐるが、概ね取るに足りない俗論であつて、大して吾人の參考になるものはない。さういふものに較べると、最近ジョン・ガンサーが論じてゐるところは、はなはだ斷片的且つ不徹底ではあるが、多少吾人の興味を惹く點もあるから、取りあへずそれを紹介し

ジョン・ガンサーの想像した日本の戦

て見ることにしよう。

彼は、アメリカ側の作戦を論ずるに先き立つて、まづ緒戦舞臺における日本の作戦を想像し、日本は開戦と同時に蘭領印度およびフィリッピンを攻略するものと見、その作戦が完了した後は、一面アメリカの貿易路を脅かし、他面アメリカの前哨地帯を攻撃するであらうといつてゐる。

従つて、彼の判断に基くと、日本海軍の基本作戦は、進んでアメリカの領海に迫り、堂々とアメリカ艦隊と輸贏を決するといふがごときものではなく、退いて西太平洋に據り、極力自己の戦果を確保するとともに、兼ねて日本本土の防衛に任じ、アメリカの貿易路および前哨地帯に對しては、南洋委任統治諸島その他を基地とする艦艇が、時に尖鋭な攻撃をこころみるがごときもので、例のバナマ運河に對する空襲などは、おそらくこれを實行しえないであらうといふのである。

かかる想定を基礎として、彼はアメリカ海軍の作戦を論じ、アメリカ海軍も

また日本本土に對する進攻などは計畫せず、まづ全力を傾けて緒戦舞臺における日本の作戦を妨害するに努める。若し不幸にしてそれが失敗に歸した場合に、主として航洋潜水艦による貿易破壊戦をこころみ、特に日本と蘭領印度との交通路を脅かして、日本に對する燃料油の供給を、出来るだけ阻止することに成功しなければならんといつてゐる。

かかる議論を吐くところを見ると、フィリッピンの喪失については、これを既定の事實として諦めてゐる彼も、アメリカ海軍の作戦如何によつては、何とかして蘭領印度だけは救ひえられるかも知れないと思つてゐるらしい。日本にとつては重大な石油問題があり、アメリカにとつても厄介な護謨および錫の問題があるから、彼が蘭領印度の運命に對して、特に異常な情熱を示すのも、むしろ當然だといふべきであらう。

彼は、さらに語をついでいふ。——以上の作戦を行ふと同時に、アメリカは何等かの手段によつて日本の委任統治諸島を攻撃し、この至難な作戦を遂行す

ることによつて、それを貳潰しに片つ端から奪取し、一方ではアメリカ海軍の地歩を固めると同時に、他方では漸次西太平洋の方面に進出して、爾後徐ろに日本に對する封鎖を行ひ、日本をして否應なく屈服させるやうに仕向けなければならぬ。

日本の委任統治諸島を奪取する點と、日本に對する封鎖を行ふ點とについては、彼はただ決論のみを主張するに止まり、何等納得すべき説明を與へてゐないが、彼も多分その方策を發見するに苦しんだのであらう。ヘクター・バイウオーターのそれに對する着想は、遙かに彼の着想に先行するものであるが、さういふバイウオーター自身も、その點に對する考へは、すこぶる非合理的なもので、毫も識者を納得させるものではなかつた。従つて、日本の委任統治諸島を奪取するとか、日本に對する封鎖を行ふとか言つては見るものの、それを現實に遣るといふことは、太平洋の狀勢の上からいつて、かなり困難な企てだといはなければならぬ。

すると、アメリカの太平洋作戦に對するジョン・ガンサーの着想は、結局封鎖によつて日本を屈服させるといふ點にある。その封鎖を實施するためには、日本の手に成るべく蘭領印度を渡さないやうにすることと、日本の委任統治諸島の大半を巧みにアメリカの手に收めることを前提條件として居るから、これらの前提條件を具備せざるかぎり、アメリカ海軍の日本に對する封鎖は、必ずしも容易でないといふことになる。

殊に、彼の口吻によると、第一の前提條件たる蘭領印度の問題は、私が既に前節において説明した通り、彼もその成功の甚だ疑はしいことを承知して居り、止むなくんば潜水艦による貿易破壊戦によつてそれに代へるといふのであるから、彼の得意とする着想を實現することは、ますます困難の度を遞加して行くわけであるが、しかも奇怪千萬ともいふべきは、充分にそのへんの消息を自覺して居りながら、尙且つ彼は法外な樂天論を述べ、日本は單獨で吾人を壊滅させることは不可能であるが、吾人は單獨で日本を打倒することが出来る！と

決論してゐるのである。

遠距離封鎖

ところが、昨年十一月十七日、汎米航空會社が、太平洋定期航空路をマニラからシンガポールに延長する計畫を發表するに際し、例のスターリング少將は、U・Pを通じて、一篇の論評を公けにし、種々對日作戰について論じてゐる。

その論評の一節において、彼は英、蘭、兩國艦隊との共同作戰を説き、さらにアメリカ艦隊の根據地たる眞珠灣と、英國艦隊の根據地たるシンガポールとの聯絡路に論及し、それはホルルを基點としてカントン島に伸び、カントン島からニューカレドニアを経由して蘭領印度に達し、蘭領印度から最後の目的地たるシンガポールに至るものだといつてゐる。この議論は、前章において私が論

スターリング少將の對日作戰の論評

じたアメリカ本土と艦隊との聯絡問題に對し、すこぶる的確な説明を與へて呉れたのみならず、兼ねて戰時におけるアメリカ海軍の太平洋作戰について、非常に貴重な參考資料を提供して呉れたので、私はそれによつて幾多の興味ある暗示を受け、その暗示に基いて、一種の具體的な着想を組み立てることが出来た。

スターリング少將のいふところによると、戰時におけるアメリカ海軍は、頭からグアムを放棄するであらうといふのだから、勿論フィリッピンをも強ひて救はうといふ考へはあるまい。グアムを放棄し、且つフィリッピンをも強ひて救はうとしない以上、アメリカ艦隊のマニラ移駐といふことは、すでに考慮の中に存在して居らないものだと思はなくてはならぬ。

彼は明瞭に日本の南進コースなるものを指摘し、海南島および新南群島はすでに日本の掌中にあり、サイゴンおよびカムラン灣の奪取も、敢て至難な業ではないから、蘭領印度一帶の寶庫は、今一步といふところまで、日本の足が伸

グアムを放棄

びるであらうと考へてゐる。しかし、蘭領印度およびシンガポールの安全については、彼は何等の疑惑をも抱いてゐないものごとく、一言もその點に觸れて居らないのみならず、所謂布哇とシンガポールとの聯絡路なるものを説いて、それは當然蘭領印度を經由すべきものだと思つてゐるぐらゐだから、戦時における日本艦隊の威力も、到底北緯十度以南の海面には及ばないものだ信じてゐるに相違ない。

さすれば、スターリング少將の腦裡に描かれてゐる太平洋作戦の構想は、ほぼこれを推知することが出来る。

彼は先づ眞珠灣におけるアメリカ艦隊と、スラバヤにおける蘭領印度艦隊とさらにシンガポールにおける英國艦隊とを考定し、そのあひだに密接な聯絡線を形成して、それを一つの共同作戦體に纏め上げ、その絶大な威力によつて、一面日本艦隊の南進を喰ひ止め、他面日本に對する遠距離封鎖を強行し、資源稀薄な日本が、漸次衰弱するのを待つといふのであらう。

さすがに前作戦部長の要路にあつた専門家の着想であるだけ、これをジョン・ガンサーなどのそれに較べると、はるかに實際的でもあるし、またはるかに合理的でもある。しかし、かかる無理のない着想でさへも、これを仔細に検討してみると、そこには多くの假定や獨斷などが存在してゐて、その立論の基礎を組立ててゐるから、吾人は未だ必ずしもこれに對して全幅的な敬意を表するわけにはゆかない。

假に、彼の着想が實現し、それが具體的に太平洋の形勢を支配したとしたら、その時の我が國は、果して如何なる立場に置かれるであらうか。

戦争の勃發と同時に行動を起した日本は、あるひは香港を取り、あるひはフィリッピンを略し、あるひはグアムを奪ひ、さらに必要とあれば、佛領印度支那の諸港灣をも占領して、充分に自己の足許を堅め、容易に敵が我が國の臥榻の下に迫ることの出来ないやうにするであらう。この時の我が國は、東經約百七十度以西、北緯約十度以北の海面を支配し、いはゆる西太平洋の主人として、

そこに金城湯池の堅壘を形作ることが出来るが、そこより一步も足を外に踏み出すことは出来ず、従つて、すべての貿易路といふ貿易路は遮断されるから、日本は恰も大きな袋の中に鎖ち込められたと同様、日本とアメリカ大陸との交通は勿論、日本と蘭領印度以南との交通、日本とマラッカ海峡以西との交通も、すべてこれは停止されて終ひ、日本は止むなく袋の中においてのみ自給自足の生活を営み、且つ自給自足の戦争をしなければならぬ。

果して然らば、日本はその時石油をどうするか。錫をどうするか。ゴムをどうするか。種々雑多の難問題は、それからそれへと引續いて起つて来るであらう。

スターリング少將の視ひどころは、全くそこにある。

日本と戦争する場合のアメリカは、急いで事を仕損じてはならぬ。一時的にグアムやフィリッピンを喪うたところで、それは何等戦理の根本に觸れるものではない。日本の弱點は資源の枯渇にあるから、假令遠捲きであらうと、これ

を完全に包圍して、いはゆる遠距離封鎖さへ行へば、日本は結局屈服するに決つてゐる。それを遣るには、蘭領印度を絶対に日本に手渡さず、シンガポールのを依然しつかりと英國の手中に握つてゐる必要があるから、英蘭兩國の海軍は、完全にアメリカ艦隊と聯絡を保ち、そのあひだに水も漏らさぬ共同作戦體を纏め上げ、これによつて日本の南進作戦に當らなければならぬ。スターリング少將は、ほぼ以上のごとく考へてゐるらしいが、それが本當に實現するといふことになる、それによつて日本が結局屈服するかどうかは別としても、日本が非常に困つた状態に陥る虞れがあるといふことだけは、何としてもこれを否むわけにはゆかない。

しかし、貿易路の遮断そのものが、ただちに日本の崩壊を意味するといふアメリカ人の常套的な考へ方は、いささか妄想に過ぎるものだといはなければならぬ。

日本は、日本それ自身の領土内においてさへ、原則として食糧品の自給自足

は出来るのだ。その上にアジア大陸の一角を保ち、フィリッピンを得、さらに佛領印度支那をも手中に收め、そこに供給を仰いだら、日本はさほど困惑するところはない。直接間接戦争に必要な資材にしても、かかる宏大な地域が存在する以上、日本はその大部分のものを何れかにおいて求めることが出来るであらう。假に求めることの出来ないやうなものがあつても、それは代用品の調達その他によつて、何とか用を辨じ得る手段もあるに相違ないから、これまたアメリカ人が自分に都合よく考へるほど、しかく逼迫した状態に置かれるものだとは言へぬ。

唯一つ困るのは石油であるが、それも海軍の戦争用としては、かなり多量のも物が貯藏されてゐるはずだし、日本の手の届く範囲内においても、全然これを産出しないといふわけではないから、窮すれば通するといふ謠もある通り、貿易路の遮断そのものをもつて、ただちに日本の崩壊を豫想するがごときは、決して當をえた物の考へ方ではない。

石油は貯
藏されて
ゐる

しかし、すでに私が告白したごとく、スターリング少將の着想が、そのまま具體的な形で實現した場合は、たとへ如何なる辯解をこころみて見ても、それは我が國に對して非常な苦痛を與へるに相違ない。

幸ひにも、この着想は、多くの假定や獨斷などの上に築かれたもので、それらの假定や獨斷などが、一々彼の思惑通りにすすんで行かないかぎり、それは到底具體的に實現する虞れはないのだから、彼がどれほど自信ありげに自説を宣傳したところで、吾人は毫も周章狼狽するところなく、あくまで冷靜にその言を聴き、靜かにそれに対する應策を講じて置けばいいのだ。

このたびのヨーロッパ戦争が勃發する以前、英佛兩國側は、しきりに自國側の有利な立場を吹聴し、例のマチノ線のごときは、幾百萬のドイツ軍をもつてするも、それは斷じて突破し得るものではないと宣傳してゐたが、實際に戦争が勃發した今日、それは果してどういふ状態であつたか！

宣傳例
のマチ
ノ線

假定と獨斷との誤謬

試みに、私はスターリング少將の着想の基礎を形作つてゐる三四の假定や獨斷などを擧げ、それが如何にたはいのないものであるかを指摘して見よう。

彼の着想は、まづ第一に英國主力艦隊の東航といふことに基礎を置いてゐるが、現在唯今の狀勢からいつて、それが到底實現し得べからざる希望に過ぎないことは、すでに私が縷説したところで、この上多く論ずる必要はあるまい。現に、最近數日間の新聞紙を見ると、ロンドンおよびニューヨークから來る電報は、海軍力の不足に悩んだ結果、英國はアメリカに對して、さらに五十隻の驅逐艦および若干の主力艦の分與を交渉してゐるといふことだ。さういふ窮境に沈淪してゐる英國が、假に太平洋に戰爭が勃發したからといつて、どうしてその主力艦などをシンガポールに送ることが出來よう。

英國艦隊の助力は望み得ず

キング・ジョージ級四隻と言へば、正に虎の子の中の虎の子だ。そんなものを割いて、今更極東あたりまで差向けるほどの餘裕があつたら、英國はまさか悲鳴を擧げてアメリカに若干の主力艦を分與して呉れとはいふまい！ スターリング少將も、無暗矢鱈に力味返るばかりでなく、すこし落着いて物を考へて見る必要がある。

萬々歩を譲つて、假に英國が若干の主力艦を極東に送り得るものとする。しかし、それが無事にシンガポールに還入り得るものだとはいふことは、果して何を根據としていふか。

英國の主力艦隊が極東に移動するといつたやうな場合には、戰爭はすでに勃發してゐるものと思はなければならぬし、戰爭がすでに勃發してゐるとすれば、英國の主力艦隊が東航する場合、それは印度洋その他の海面において、早くも日本艦隊の攻撃を受けることもあるものとしなければならぬ。戰爭は徹頭徹尾相手仕事であるから、相手の方が機敏に行動すれば、英國艦隊の目的地た

英國艦隊の目的地たシンガポール

るシンガポール根據地できへ、都合よく英國艦隊が到着するまで、必ずしも無事息災であるとはかりは決めて置くわけにもゆくまい。シンガポールに遣入れなければ、シドニーに遣入るまでだ、シドニーに遣入れなければ、メルボルンに遣入るまでだといふのであれば、それはすでに作戦の根本が動搖したのだから、スターリング少將の着想は、もはや三文の價值もなくなつたものだ。

さらにスターリング少將の着想には、蘭領印度艦隊および濠洲艦隊の協力といふことが假定されてゐる。前述の通り英國の主力艦隊が東航出来ないものとしたら、それが相違なく實現したところで、果してどれだけの勢力を形成することが出来るか。

蘭領印度艦隊

蘭領印度艦隊は、七千噸未満の輕巡洋艦三隻、驅逐艦六隻、新型潜水艦二十隻ばかりから成り、濠洲艦隊は、甲級巡洋艦二隻、驅逐艦五隻から成るものだが、それに若干英國の艦艇が加はるものとしたところで、その總勢力たるや、きはめて微々たるものだから、到底それをもつて強大な日本艦隊に當ることは出来

各個擊破の戦法

ない。しかも、これらの艦艇は、宏大な戰略海面を負擔してゐる關係上、常に合同して作戦するといふわけにはゆかないから、比較的弱勢な日本艦隊といへども、優にこれを各個擊破によつて殲滅する機會を與へられ、自己の基本作戦を遂行する上に、さして重大な障礙を感ずることはないであらう。

一例を挙げると、日本が假にシンガポール攻略の作戦を立て、これを實際に行うたものとする。かかる場合の日本軍は、勿論陸海空の三軍を挙げ、その共同作戦をもつてこれに當るに相違ないが、その際の蘭領印度艦隊および濠洲艦隊は、いづれも自國自身の防備を放棄して、すぐさまシンガポールに馳せ参じ、それぞれブルック・ポーム極東軍司令官の命を奉じて、極力日本軍の攻撃を阻止することに努力するものだと豫想していいであらうか。

これはひとりシンガポールの場合にのみ限られたことではない。メラバヤの場合においても同様であるし、またシドニーの場合においても同様である。樂天家のスターリング少將が、眞にさういふことを信じ、それをもつて當然さう

あるべきものだと思へてゐるとすれば、彼は唯名ばかりの専門家であつて、すこしも戦争の實際といふものに通じて居ないといはなければならぬ。

スターリング少將の着想の中には、シンガポールおよび蘭領印度の安全といふことも、もとより當然至極のこととして疑はず、それを基礎として種々の着想を加へてゐる點が多いが、それも果してどういふものであらうか。

英國の主力艦隊は來られない、蘭領印度艦隊と濠洲艦隊との協力も覺束ないのみならず、たとへその協力が都合よく實現したところで、さういふ微弱な艦隊勢力をもつてしては、到底強大な日本艦隊に對抗することは出來ないといふことになつた曉、シンガポールは兎も角として、蘭領印度がよくみづからを支へ得たとすれば、それはむしろ奇蹟であるといはなければなるまい。

オランダ人自身は、それについて、果してどう考へてゐるか。一九三四年の秋オランダの國防省は、一九三五年の初頭に整備すべき蘭領印度艦隊の勢力なるものを發表したが、これは日本艦隊の進攻に對し、他國の援助があるまで、

これに對抗するのが目的であると説明してゐる。して見ると、オランダの當局者でさへ、日本艦隊の進攻に對し、他國の援助がないかぎり、自國單獨の艦隊勢力をもつてしては、到底これを防禦しえないものと思へてゐるのだ！

シンガポールの場合、やや蘭領印度の場合と事情を異にしてゐる點はあるが、これといふほどの艦隊も居らず、さりとて大した空軍も存在してゐないで、ただ單に要塞の威力のみが何よりもたよりのたつたやうな場合、陸海空の三方面よりする日本軍の強力な攻撃に對し、シンガポール防衛軍は、よく長期に互つてこれを維持し得るであらうか。

私は必ずしも輕率にエドマン・デユラーツのシンガポール悲觀論や、サー・イアン・ハミルトン將軍のシンガポール脆弱論などに與するものではなく、また況んや、アーネスト・ホーザーのシンガポール没落論に與するものでもないが、いかに難攻不落の防備を誇負するシンガポールでも、これをして眞に難攻不落たらしめるためには、それに必要な海軍および空軍が居り、且つその機能を遺

憾なく發揮させるに必要な陸軍がなければならぬが、現在唯今のシンガポールは、到底それだけの要求を充し得る地位には立つてゐない。いはば本國を距ること一萬海里の東方に孤立し、ほとんど無援の地に放棄されたも同然な境遇にあるのだから、その點を看過してゐるスターリング少將が、いかにシンガポールの安全を信じてゐるからといつて、吾人は容易にその見解を支持するわけにはゆかぬ。

従つて、スターリング少將の所論に對しても、レーモンド・モーリーのもしも論が、もつとも適切に當て嵌まることになる。もしも英國の主力艦隊が東航したら、もしも蘭領印度およびオーストラリアの艦隊がそれに合同したら、もしも蘭領印度を攻略されなかつたら、もしもシンガポールを維持することが出来たら、アメリカはかくかくの作戦をとることが出来るといふのだから、私はそれをもつて多數の假定や獨斷などの上に築かれたたはいのない着想と見、これに對してあまり多くの敬意を拂ふわけにゆかないのだ。

多數の假定や獨斷にたつ所論

アメリカ海軍の現首脳部の慎重

果せるかな、ワシントンから來る情報の多くは、アメリカ海軍の現首脳部が、速かにヤーネル提督やスターリング少將などの所論に賛同せず、その對日作戦を考慮するに當つて、すこぶる慎重な態度を示してゐると傳へてゐるが、それは勿論さうあるべきことであり、さすがにアメリカ海軍にも、その人必ずしもすくなからずといつたやうな感じがする。

以上の叙述によつて、ジョン・ガンサーの近距離封鎖論は、頭から問題になる値打がなく、スターリング少將の遠距離封鎖論も、またすこぶる覺束ないものであるといふ點に關し、私は略その説明を終つたものと思ふ。従つて、つきには方面を變へ、我が國の立場から太平洋作戦を觀察して、アメリカと戦ふ場合、日本は果して如何なる作戦をとり、それによつて如何に最後の勝利を獲ようとするかを考究して見たい。

第十 新嘉坡攻略

戦争開始の時機

究極の勝利を確保するためには、いかに有効適切に戦ふかも大切であるが、それに劣らず大切なことは、確實に戦争開始の好機をつかみ、断じてそれを逸しないやうにすることである。

例へば、アメリカ艦隊の一部が、マニラまたはスラバヤに移動しようとする時、その移動を終つた後において戦争を開始するのと、その移動を終らない以前において戦争を開始するのでは、自後の作戦を誘導する上に、我が國は非常に重大な影響を蒙るから、決してこれを同一視することは出来ない。それと

開戦時期
の問題

同様英國艦隊の一部が、假にシンガポールへ移駐する目的をもつてその本國を出發したとすれば、それが未だ目的地に到達しない時期において開戦するのと、それがすでに目的地に到達した時期において開戦するのでは、ひとり艦隊そのものの運命において異なる結果をもたらすばかりでない。シンガポール攻略の可能不可能を決定する上に、ほとんど計るべからざる差違を生じて來るであらう。

吾人は何も戦争を欲するものではない。しかし、吾人の意思如何にかかはらず、戦争はもはや避くべからざる事態の下に置かれてゐると考へる時には、一瞬、一刻をも躊躇することなく、吾人は即時起つて戦争を開始しなければならぬ。吾人の起つことが早ければ早いほど、それだけより多く有利なチャンスが吾人に興へられるから、吾人はその有利なチャンスを捕捉して、出来るだけ巧みに自後の作戦を指導し、敵をして終始受け身の地位に立たしめ、戦争開始の當初における情勢が、よくその終局をも支配するといつたやうな立場を維持しなけ

有利な
チャンス

ればならぬ。

かつてナポレオンはそれに成功し、ドイツは今それに成功してゐる。従つて、客觀的狀勢から言へば、戦機はすでに熟してゐるにかかはらず、いたづらに左顧右眊して事を決することが出来ないやうなものには、到底赫々たる戦勝は與へられない。

私は、日本の果斷、よく戦機を捉へ、斷じて開戦の時期を誤まらないことを信じてゐる。さすれば、開戦と同時に行動を起した日本は、まづ何事をなさんとするであらうか。

あるものはそれをもつて香港の攻略であると思ひ、またあるものはそれをもつてフィリッピンの占領であると考へるかも知れない。しかし、開戦直後の日本としてなすべきことは、今後の戦争を繼續し、且つ日本の安全を確保する上に、必須止むをえざる作戦を行ひ、相違なくその目的とするところを獲得するにあるといはなければならぬ。果して然らば、緒戦舞臺における日本の作戦は、

開戦と同時に日本は何事をなさんとするか

蘭領印度の石油産地奪取

當然蘭領印度の石油産地を奪取し、進んでシンガポールの根據地を攻略することであらう。前者は、戦争繼續に缺くべからざる液體燃料を確保するために必要であり、後者は、敵艦隊の據點を除いて、南方航路の安全を保障するために必要だから、たとへいかなる努力と犠牲とを拂はうと、日本は斷じてこれを行ふといふ強烈な意志を示すに相違ない。

蘭領印度の石油産地を奪取するといふことは、なにも蘭領印度そのものを奪取するといふことではない。蘭領印度の石油産地は、主としてスマトラおよびボルネオの兩島に分布してゐるが、それは概ね海岸または海岸に近い地域に存在してゐるから、微弱な蘭領印度艦隊を撃破するか、またはそれをどこかの港灣に封鎖した後、二三の艦艇に搭載した若干の陸戦隊を送つて、これを順次に奪取してゆけば、クタイおよびタラカン島を中心とするボルネオ油田の代表的なものや、ジャムビ、ペルラト、およびバレンバンを中心とするスマトラ油田の代表的なものを押へるぐらゐなことは、さまで手間隙のかかる仕事ではあ

るまい。

オランダ政府は、夙にこれを憂へ、ボルネオの石油産地を守るために、若干の陸軍および空軍を配してゐるといふことであるが、マレー人の兵隊さんや、玩具じみた飛行機の若干があるからといつて、それで日本軍の進攻を阻止し得ると思ふものがあれば、それはよほどどうかした頭腦の持主である。

ここで問題となるのは、真珠灣にあるアメリカ艦隊が、蘭領印度の石油産地に對する日本の行動に對し、何か効果ある妨害をなし得る餘地があるかどうかといふことだ。ところが、真珠灣とボルネオの東海岸との距離は約五千海里、真珠灣とスマトラとの距離は、約五千五百海里乃至約六千海里であるから、そのあひだを航行するために要する日数は、すくなくとも十二日間以上を要し、とても早急の間には合はない。

従つて、アメリカの根本方針が、スターリング少將の夢想することく、蘭領印度の石油産地を、絶対に日本の手に渡さないといふところになれば、アメリ

カは豫めその艦隊の一部を蘭領印度に送つて置き、それによつて日本の行動を阻止する外はない。彼が真にさういふ作戦を行ふものとすれば、それ自體が、すでに戦争の開始を意味するものだから、日本さへ敏活に自己の欲するところを斷行すれば、特に地の利に恵まれてゐる關係上、日本は優にアメリカの機先を制することが出来るであらう。

ひとり石油産地といはず、蘭領印度の主要島嶼若干を奪取するぐらゐなことには、蘭領印度海軍の現状、および總數二ヶ師團約三萬三千に過ぎない守備軍の兵力から見て、さまで困難なことではない。

蘭領印度における軍事當局の傳統的見解によると、ジャヴァを攻略しようとする日本軍は、まづスラバヤを襲うて、その艦隊を封鎖または殲滅し、しかる後徐ろに上陸作戦に移るであらうといふのである。それかあらぬか、蘭領印度全體の海岸は、現在さかんにその防備を強化しつつあつて、到る處要塞砲の數備や、移動砲兵隊などの改良を努め、就中スラバヤ海軍根據地を中心とする海

陸兩方面の施設に至つては、特にこれを重視し、大いに畫策するところがあるらしい。蘭領印度軍司令官ブルストラ中將のごときも、それについて大いに自信ありげな口吻を漏らしてゐるが、日本がいよいよ意を決してこれを攻略するといふことになれば、そこに多少の障礙が横はることがあらうと、それはあまり大した問題にはなるまい。

しかし、當時の日本は、蘭領印度の石油産地こそ必要とするが、いたづらに戦局を擴大して、各地に兵力を分散することについては、特に自省するところがあるに相違ない。従つて、南進後直ちにセレベスを侵し、引續いてジャヴァを攻めるといつた風な作戦は、出来るだけこれを避け、取りあへず必要な石油産地を押へた後は、全力を擧げてシンガポールの攻略を志し、他の方面に對する作戦は、むしろこれを後日に期するであらう。

敢て言へば、蘭領印度の石油産地のごときも、強ひてこれを兵力に訴へて奪取しなくとも、我が國にして逸早くシンガポールを攻略さへすれば、孤立無援

シンガポールの攻略



の地位に置かれた蘭領印度政府は、平和の裡にこれを日本に引渡し、蘭領印度における日本は、あたかもルーマニアにおけるドイツのごとく、一兵をも罽らずして、容易にその目的物を獲得することが出来るかも知れぬ。

新嘉坡の武装

さて然らば、シンガポールの攻略は、果してどういふものであらうか。

私は前章においてすでにその問題に觸れ、現在の状態の下にあるかぎり、

それはしごく困難なことではないといった。なるほど、根據地としてのシンガポールは、さながら鐵壁のごとく武装されてゐる。西方チャワン島正面の岬角から、中央の商埠區域を経て、東方チャングの兵營町に至るまで、熱帯樹の綠に包まれた丘陵といふ丘陵は、いづれも堡壘をもつて蔽はれてゐるのみならず、前面の小島嶼をはじめ、東方ジョホール河の入口に臨む島嶼および岬角に至るまで、一として巨大な砲煩をもつて装備されてゐないところはないといふ有様だ。従つて、ただその嚴めしい外觀だけを見ると、これでは到底手が付けられないといつたやうな感じもしないではあるまい。

殊に、それらの堡壘の中には、長さ六十呎、重量百五十噸の十八吋砲もあつて、それは優に三千三百三十三ポンドの巨弾を發射し得るといふのだから、氣の小さい人間などは、ただそれを承つただけでも、簡単にシンガポールの難攻不落を信仰するやうになるかも知れぬ。

ところが、シンガポールを防衛するものは、ひとり要塞ばかりではない。

シンガポールの難攻不落か

シンガポールの守備兵力

第一に陸軍がある。その總兵力に至つては、素より不明であるが、一九三六年前後には、純粹の戦闘部隊に屬するものが、約八千人はゐたらしい。最近俄かにその兵員を増加し、シンガポールの學校を徵用して、その營舎に宛ててゐるといふことだが、それが果してどの程度まで本當であるか、私には判らない。いづれにしたところで、本國がああいふ狀況で、猫の手も欲しいといつた騒ぎであるのに、極東一萬海里の彼方まで、それほど大した兵力が送れようはずもないではないか。強ひて言へば、お隣りの印度から土人軍を移駐することであり、現にそれをやつてゐるらしいが、いくらその數を高く見積つて見たところで、現在シンガポールに駐屯してゐる總兵力は、せいぜい一萬程度のものであらう。悪くすると、印度から移駐した土人軍の數だけ、以前からゐたインニス・キマング・フエチリア大隊その他の本國兵が、その代りに英國へ歸還してゐるといつたやうなことも、全然ありえないことだとは思はれぬ。

陸軍の外には空軍がある。基地としては、ジョホール海峡に臨んで有名なテ

ムガー飛行場があり、シンガポールの商埠に接して、最近竣工したカラン民間飛行場があるが、その他にも尚ほ二三の小飛行場があるらしい。空軍の總勢力も、やはり不明だといふ外はないが、一九三六年前後には、各種の飛行機および飛行艇を取交せて、せいぜい百二三十機もあつたであらうか。

一九三七年の十二月、シンガポールの軍事當局は、同地の空軍勢力を擴大して十二個中隊に編制し、その飛行場四個を増して五個にするといふ案を發表した。それが今日までに豫定通り出来上つてゐるとしても、シンガポールにおける現在の空軍は、海陸兩方面の勢力を合算して、ものの二百機にも達してゐれば大したもの、おそらくはまだそれほどのところまでは行つてゐまい。残る海軍はどうであるか。

要塞本位に出来てゐるジブラルタルとは違つて、シンガポールは海軍本位に出来てゐるのだから、そこには相當強力な海軍力が存在してゐなければならぬはずだ。擧揚量五萬噸強と傳へられる浮船渠も、長さ一千呎、渠口の幅百三

十呎、干潮時盤木上の水深三十五呎といはれる乾船渠も、それは皆軍艦のために出てゐるものだから、いたづらに雨曝しにして置くべきものではない。ところが、これらの設備が出来上つてから以後、すでに三四ケ年は経過してゐるが、また一度も艦隊らしい艦隊がそこに這入つたことはなく、排水量七千二百噸の根據地艦 (Base Ship) テラー號が、孤影蕭然としてそのお留守番を叨附けられてゐるといふ有様だから、無暗にその評判こそ高いが、海軍根據地としてのシンガポールは、あまり多幸な日を送つてゐるとは言へぬ。

今シンガポールに據つてゐる艦艇としては、おそらく二三のものがゐるに過ぎまい。英國支那艦隊の勢力は、元來航空母艦一隻、巡洋艦五隻、潜水艦十五隻、驅逐艦十隻、スループ五隻、各種艦艇十一二隻ぐらゐるものであり、その勢力の一部が、時々シンガポールに移駐してゐたらしいが、このたびの戦争が勃發すると、英國支那艦隊の所屬艦艇は、大部分地中海以西に召還されたので、その残存勢力は、きはめて微々たるものに過ぎないであらう。

従つて、太平洋に戦争が勃發し、そこらあたりに散在してゐる艦艇のすべてが、即時シンガポールに集中され、それに本國から派遣された艦艇の若干が、新しい勢力として加はるとしても、戦時におけるシンガポール艦隊は、まづ平時の英國支那艦隊に毛が生えたぐらゐなもの、堂々たる日本艦隊の勢力に對抗して、正面からこれと四つに組むといふやうな離れ業は、到底出來得べきものではない。

して見ると、現在におけるシンガポールの防備は、大體要塞を主體とするものであつて、陸海空三軍の力は、ただこれを補佐する程度の役目を勤めるに過ぎない。

尤も、シンガポールの軍事當局は、最近俄かに防備の強化に努め、領海面における土人の航行を統制したり、數回に亘つて防禦演習を行つたり、米の配給量を限定したり、白色混合の義勇兵に猛訓練を施したり、海岸を鐵條網やトーチカで固めたりしてゐるやうであるが、いくらさういふ點に力齧を入れて見た

シンガポールの防備は、大體要塞を主體とする

心中不安に堪へざらん

ところで、根本の防禦力そのものが脾弱で、陸海空三軍の力に對しては、多くこれを望むことが出來ないといふ有様では、まことに心細いものだといはなければならぬ。英國は勿論その點を自覺し、心中不安に堪へない點はあるに相違ないが、それかといつて危急存亡の岐路に立つてゐる本國を見棄てて、その艦艇または空軍の一部を割き、これをシンガポールに送るといふわけにもゆくまい。

攻略戰の構圖

現在唯今の狀勢の下において、日本が斷然これを攻略するといふ決意さへ有れば、私は比較的雜作なくその目的を達することが出來ると思ふ。

勿論、相當に強力な艦隊が、それに對して向けられなければならぬ。海南島とシンガポールとの距離は、約千三百海里に過ぎないし、さらに交趾支那の某

リオ群島
を代表す
るビンタ
ン島

某港灣を利用するとすれば、その距離は一層短縮して、せいぜい六百三四十海里に過ぎないから、日本の遠征艦隊は、それによつて至極都合のいい地位に置かれるのみならず、旅順口に對する長山列島のごときものを必要とする場合は、世界最多の燈臺島として知られたリオ群島中の一島において、これを求める方針さへ立てると、それも敢て困難なこととは思へない。これらの群島を代表するビンタン島は、シンガポールの前面近く横はつてゐるし、その他の群島は、ビンタン島の南方近く碁布してゐるから、我が遠征艦隊の利用する錨地としては、まことに適當な資格を具へてゐる。

我が空軍も、勿論これに協力すべきものであるが、その基地としては、やはり海南島をもつて足れりとするのであらう。シンガポールと海南島との距離は、約千九百キロであるから、それが餘りに遠きに過ぎるといふことであれば、これを佛領印度支那の何處かに求めることも出来るであらうし、さらにまたこれを蘭領印度の何處かに求めることも出来るであらう。

シンガポ
ール攻
略の
空軍
基地

我が遠征艦隊が、リオ群島中の一島、例へばビンタン島のサムバト灣にでも、若し一時的な錨地を求めるといふことであれば、我が空軍も、その附近の適地に一時的の基地を急造して、差當つての用に供することが出来ないといふわけはあるまい。平素事なき場合においては至難とする事柄も、戦時非常の際には何とか工夫のつくもので、斷じてこれを行ふといふ信念さへあれば、毫も窮弱するところはないはずだ。殊に、シンガポール附近の陸地および島嶼は、概ね我が當面の敵國たる英國の領土か、然らすんば我が當面の敵國に准すべきオランダの領土かであるから、我が強烈な意志の前には、すべてが可能化されて來るに相違ない。

すべての陣容が整うた後、我が海空軍は、一齊にシンガポール攻略の火蓋を切り、空軍は空中より、海軍は海上より、共に相呼應して、これを爆撃し、これを砲撃し、これを雷撃したら、敵は果して如何に應戰するであらうか。

微弱なりといへども、敵の艦艇も出撃して來るであらう。劣勢なりといへど

も、敵の空軍も出動して来るであらう。要塞といふ要塞は、すべてその砲門を開き、あるものは我が艦隊を目がけて弾雨を注ぎ、あるものは我が空軍を目がけて亂射し、赤道直下の海は、須臾にして阿鼻叫喚の巷と化するであらうが、それが果して何時まで續き得るであらうか。

時の経過とともに、數字上の絶對的懸隔は、次第にその効果を現し、敵の微弱な艦隊は、ほどなく我が強力な艦隊によつて驅逐されるであらうし、敵の劣勢な空軍は、間もなく我が優勢な空軍によつて制壓されるであらう。さすれば、我が海空軍の猛攻に當つて、終始その進攻を阻止するものは、わづかに要塞の砲煩だけだといふことになるが、私は容易にその萬能力を信するわけにはゆかない。

攻防幾日かの後、私が次ぎのやうな光景を想像したとしたら、それは不當であると言へるであらうか。

——英國艦隊の過半は傷ついて、辛くも錨地に逃げ込んでゐるが、その中の

六七隻は、たしかに沈没したらしい。ブラカン・マチの岩礁には、擱坐した驅逐艦が、今にも横倒しにならんとして、淋しく波にもまれてゐる。高く低く空に翔んでゐる飛行機は、いづれも機翼に赤い丸を描いたものばかりで、英國機と覺しいものは、一つもその姿を見せない。半ば廢墟と化し、滿目荒涼たる姿となつたシンガポールの市街には、まだところどころ火の手が擧つて、その濃々たる煙は恰度今爆發したばかりの石油タンクの漆黒な煙と混つて、物凄く夕の空を蔽うてゐる。

——街の中央にあるカンニング要塞は、もうよほど以前に沈黙して終ひ、附近の島嶼にある要塞も、ほとんど氣息奄々たる状態で、時々思ひ出したやうに遠擧的な砲火を送つてゐる。さすがはクララ・ジョホールの入口を扼するチャングの要塞だ。彼はあたかも最後の決闘者のごとく、絶えず日本艦隊の集中砲火を浴せかけられ、間斷なく日本空軍の猛烈な爆撃を見舞はれながらも、その巨大な砲煩からは、まださかんに火を吐いて、極力悲壯な防戦に努めてゐる。

しかし、大勢はすでに決したもののか。多数の陸兵を搭載した日本の運送船隊は、早くも敵前上陸の準備を終り、夕闇迫る海上を滑つて、しづかにタンジョン・カトンの海岸に近づいて行く……。

ガリポリ攻略戦の場合を援用して、これをシンガポール攻略戦の場合に當て嵌めることは、必ずしも當をえた遣り方ではない。

前者の場合には、無限の補充を約束され、且つ宏大な背後地を保障されてゐる強力な軍隊が存在してゐたが、後者の場合には、何等の補充も約束されず、且つ猫額の背後地さへ保障されてゐない微力な軍隊が存在してゐるばかりだ。従つて、前後兩者の防禦戦は、等しくこれを防禦戦と呼んでも、根本的にその本質を異にするものだといはなければならぬ。

現に、ガリポリ攻略戦の勇者サー・イアン・ハミルトン將軍は、シンガポールの戦略的地位を論じて、それは攻撃國の主力からは非常に近いところにあるのに、防禦國の主力からは非常に遠いところにあるから、ひとたび戦争が起れば

シンガポールの
戦略的地位

攻撃國は一溜りもなくこれを攻略するであらう。かかる脅威に對して備へるためには、ぜひともセイロン島に強大な根據地を構築しなければならぬといつてゐる。

蘭領印度の石油産地を押へ、且つシンガポールの根據地を攻略さへすれば、我が國はそれで一先づ第一次の作戦を完了したもので、爾後の作戦を遂行することは、さまで急ぐ必要はない。

戦争の繼續に要する燃料は、スマトラおよびボルネオ兩油田の供給をもつて足るであらうし、もしそれが戦争によつて破壊または爆破されてゐるやうな場合は、極力その現状恢復に努め、一日も早くこれを従前の事態に復歸させなければならぬ。ジャヴァの或る地方および英領ボルネオの各地においても、近頃石油の産出の眼醒ましいところがあり、サラワクのクチン港のごときは、將來有望な石油輸出港の一とさへ稱せられてゐるぐらゐだから、我が國が若しそれをも必要とするやうな場合には、これに對してもまた兵を用ひなければならぬ

我が國の
第一次の
作戦完了

い。しかし、日章旗がすでにシンガポールの政廳に翻つてゐる以上、バイテン
ゾルグの總督や、英領ボルネオの現地官憲なども、まさか無用な抵抗をこころ
みて、この上無意味な戦争を遣るものではあるまい。

シンガポールの攻略は、太平洋の戦略的情勢に對して、もつとも根本的な決
定を與へるものである。それによつて、日本の南方航路は、すくなくとも赤道
以南に伸びるのみならず、さらに東經百五度の線を超えて、遠くベンガル灣に
達するであらう。それと同時に、アメリカ艦隊または英國艦隊は、ともに布哇
またはトリンコマリに足止めをされ、それ以西または、それ以東の海面に進
出することが至難になるから、彼等の空想する英米協同作戰の夢は、根柢から
破壊されることとなつて、日本に對する遠距離封鎖の理想も終に雲散霧消する
であらう。西太平洋および南太平洋の一角において、日本がかかる牢固たる地
歩を占めた時、極東における日本の地位は、たとへいかなる力をもつてするも、
もはや確固不拔なものとなるに相違ない。

日本の南
方航路は
赤道以南
に伸びる

第十一 香港と比律賓

香港の防備其他

日本がその第一次作戰を完了した後、その際の日本が有つべき外郭防禦線の
延長は、果して如何なる形勢を呈するであらうか。

試みに、太平洋の地圖を開いて、その壯大無比ともいふべき外貌を一瞥する
ことは、すこぶる快心な業だといはなければならぬ。吾人は先づ千島列島の北
端占守島と、マーシャル群島の東南端ラタック列島とのあひだに一線を引いて、
それを東方における日本海軍の勢力限界線とする。これに對するアメリカ海軍
の勢力限界線は、アリューシャン群島の西端アツチユ島から、南方ミッドウエ

日本の外
郭防禦線

一島を經由して、遠く布哇群島に接續する線であるが、これはさらに南東サモア島に延びて、一つの大きな弧線を描くことになる。

従つて、東方における日本海軍の勢力限界線は、あたかもアメリカ海軍の勢力限界線によつて抱擁された形となり、このあひだにおける日米兩國の戦略的状態は、きはめて微妙な關係の下に置かれるであらう。

ついで吾人は眼を南方に注がう。そこに存在すべき日本海軍の勢力限界線は、勿論その中に蘭領印度の諸島嶼を含み、且つ英領マレー半島の本土および島嶼の大部分を抱擁するはずだから、それはスマトラ島の西北端コタラジャの港市から起り、東經九十五度の線に沿うて南下し、南緯十度または十二度の線に至つて、さらに東に向つて伸び、それより大小スンダ列島の南方を經由して、アラフラ海または珊瑚海の一角から、遠く北方ヤルット島の東端に達するものである。

従つて、それは印度洋および南太平洋の一部を通過して、直接印度およびオ

ーストラリアの領土に接觸するものだから、日本海軍の勢力限界線は、西方および南方の海面において、さらに英帝國を脅威し、英國海軍尙ほ健在であるかぎりには、絶えずこれと對立し、その間多少の問題を生ずる場合があるであらう。さすれば、第一次作戦を完了した後、當時の日本が有つべき外郭防禦線の延長は、約九千海里乃至一萬海里に達し、その中に寒熱温の三帯を含み、日本本土および朝鮮以外に、ソグイェット領シベリア、滿洲國、支那、フィリッピン群島、佛領印度支那、タイ、英領ボルネオ、英領マレー半島、および蘭領印度の大地域を抱擁する。假に日本とそれ以外の世界との交通が遮斷されたとしても、日本はそれによつて優に自給自足し、且つ戦争の繼續に必要な物資をも、充分これを調達することが出来るであらう。

殊に、かかる外郭防禦線の完成によつて、フィリッピン、タイ、佛領印度支那、英領マレー半島、および蘭領印度との貿易に努力し、これを日本の獨占的なマーケットたらしめることが出来たら、自國の産業組織を維持し、さらにそ

の將來の發展を保障する上に、あたかも絶唯無二の機會を與へられたことにな
るかも知れぬ。

忌憚なく言へば、かかる外郭防禦線が完成さへすれば、その防禦線内におい
ては、日本は自己の欲する如何なる行爲をもなすことが出来るし、自己に必要
な如何なる状態をも作り出すことが出来る。

従つて、兵を動かさうと思へば、それ以上に兵を動かすことも自由であるし、
土地を占領しようと思へば、さらに新らしい征戰を行ふことも自由である。し
かし、日本が本來の目的とするところは、いはゆる大東亞の新秩序を建設する
ことであつて、無暗に領土を擴張することでもなければ、矢鱈に戰爭をするこ
とでもないから、都合よく第一次の作戰を完了した後は、萬止むをえざる戰爭
行動以外には出来るだけこれを避ける方針を執り、極力アメリカ艦隊の進攻を
阻止するとともに、その貿易破壊戰に備へ、且つ餘力の全部を擧げて、それを
建設の方面に向けなければならぬ。

しかし、蘭領印度の石油産地を押へ、それと同時にシンガポールさへ攻略し
たら、それで内輪固めに必要な總ての戰爭を終つたといふわけにはゆくまい。

第一に香港があり、第二にフィリッピンがある。兩者は共に當面の敵國たる
英米兩國の領土または領土と見做すべきものであるのみならず、それは何れも
英米兩國の軍事的據點であつて、要塞もあれば、軍港もあり、それに必要な兵
員も駐屯してゐるといふ有様だから、それをそのままの状態で放棄してゐると、
ことごとくに我が國の戦略的行動に支障を生じ、吾人はそれによつて如何なる不
測の災禍を受けないとも言へぬ。

殊に、日本の貿易破壊を目的とする英米兩國が、そこに多少の潜水艦でも送
つて、極力日本の南方航路を攪亂するといふことにでもなると、我が國はそれ
によつて非常な脅威を受け、落着いて建設的な努力をこころみる餘裕さへない
ことになるから、吾人はぜひともこれに對して必要な處置を講じ、絶対に後顧
の憂ひを斷たなければならぬ。これから以後の作戰を、私は便宜上第二次作

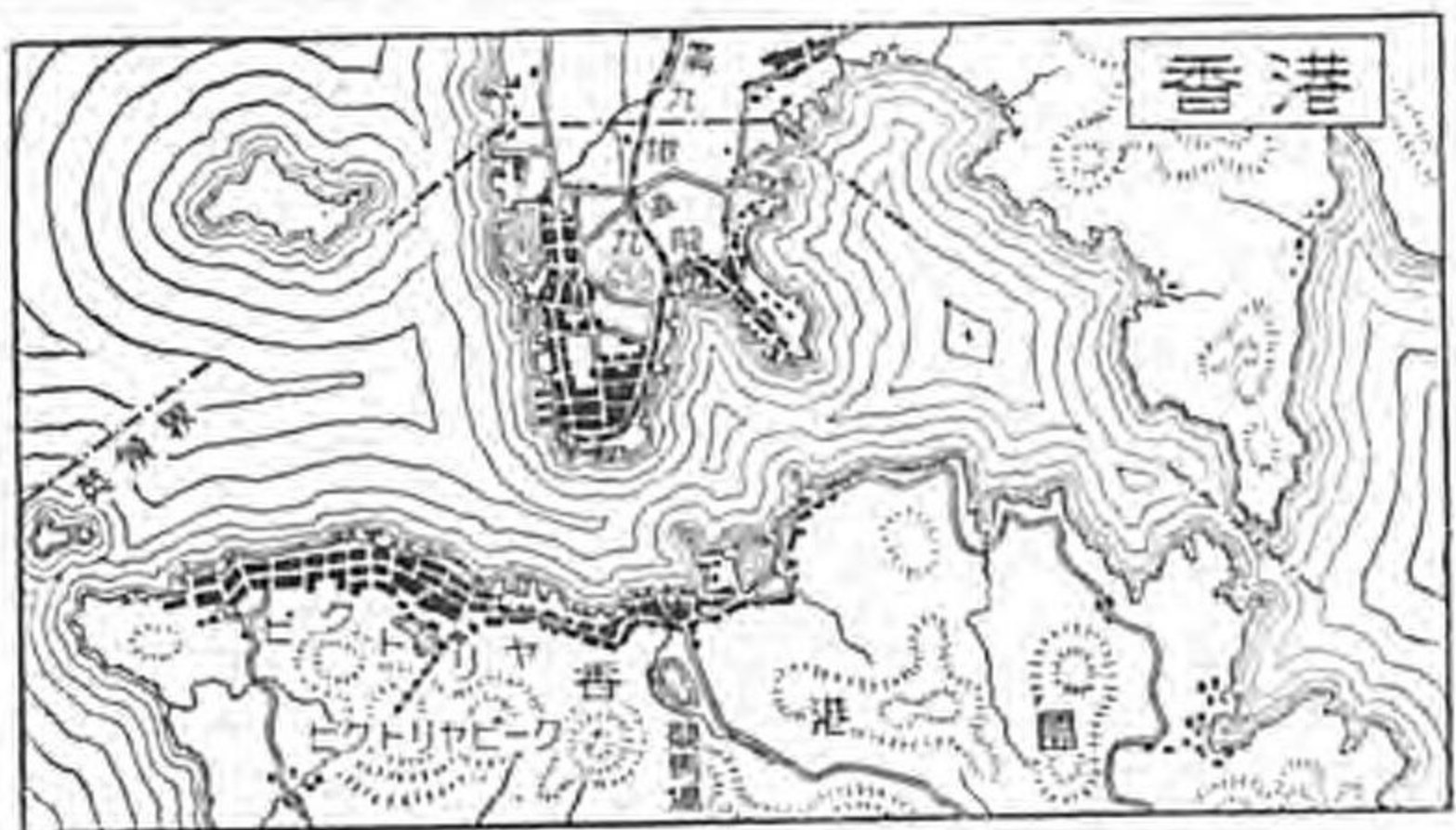
戦と呼ぶことにする。

日本軍司令官の降服勧告に對して、香港總督があくまでこれを拒否する場合には、日本軍は即時これを攻略することに決し、海陸空の三軍を擧げて、ただちに總攻撃を開始する外はない。

香港の位置は、臺灣の西方約四百海里のところにあつてゐる。我が占領地たる廣東灣の東方にある小島で、廣東省城から約九十哩隔つてゐる。東西約十一哩、南北約二哩乃至五哩、總面積わづかに三十二平方哩に過ぎない。尤も、對岸九龍半島の一部もそれに附屬してゐるから、この猫額の地域を加算し、さらにその附近の租借地を併せると、總面積約三百九十一平方哩といふことになる。いづれにしても、彈丸黒子の地で、有數の貿易港ではあるが、それ自身大した經濟的價值があるところではない。

最近のロンドン・タイムズ紙は、現在における香港の地位を評して、それは日本の支那沿岸封鎖強化の圏内に包含されるかも知れないといつた。シンガポ

現在の香港の地位



ールが陥落した後の香港の地位は、四面を完全に包圍された上、しかも萬里の邊境に放棄された孤立無援の嬰兒も同様だから、たとへ日本軍の總攻撃に直面した場合でも香港は大した抵抗をなし得ず、多少戦争らしい眞似事さへしたら、ただちに我が軍門に降るであらう。

當時の香港には、勿論軍艦らしい軍艦はないであらうし、そこに駐屯してゐる英國の兵力といつても、せいぜい歩兵三個大隊、砲兵若干、それに少數の居留民から成る義勇兵團があるばかりだから、我が海陸空の三方面からする猛攻に對して、彼等が如何に力戦苦

闘して見たところで、その結果たるや知るべきのみで、それはむしろ徒勞に過ぎないといつてもいいのだ。

香港の防備については今日までに色々のことが傳へられてゐないでもない。英國の軍事當局は、一九三二年頃から香港の防備を強化することに決定し、九龍の前面にある小島温船洲と香港とを聯絡するために、海底を通じて地下道を掘鑿したとか、温船洲の防備を強化する目的で、その高地に地下砲臺十一座を構築するとか、ミルス灣の沿岸に移動式防空砲を備へるとか、飛行中隊を増置するとか、重爆撃機の数をふやすとか、九龍に立派な防空砲臺を設けたとか、香港の背面にある升旗山に幾座かの地下砲臺を構築したとか、銅鑼灣一帯の防備を強化したとか、景德飛行場に夜間着陸場を作つたとか、海軍義勇兵團を編成したとか、すべての費用が一千萬磅の巨費を要すとか、またその外にも色々なことが傳へられてゐるが、おそろしくその半ばが眞實で、その半ばは虚偽であらう。

しかし、何れにしたところで、防備の基礎そのものが、早くから時代遅れの品物になつてゐるところへ、後から後からとつき足し、工事をしたものだから、よし、相當巨額な金を費つてゐるにしても、それが今では根本的に面目を一新し、名實ともに難攻不落の堅塞となつてゐるものとは思へない。

考へて見ると、過去一百年間にわたる香港の光輝ある歴史も、やうやく終焉に近づいて來た。このまま事なく経過しても、ユニオン・ジャックの旗下における香港の繁榮は、今後もの十年とは續かないであらう。況んや、太平洋に戦争が勃發した場合においてをやだ。威海衛はどうであるか。旅順はどうであるか。清國北洋艦隊およびロシア太平洋艦隊の滅亡と同時に、兩者ともにその歴史的役割を終り、今では辛うじて人間の記憶の裡にのみ生き残つてゐる。いかなる理由があつて、香港の繁榮のみが、今後尚ほ長く存續し得るといふのであるか！

比島攻略の意義

フィリッ
ピンはど
うなる

ところが、フィリッピンの場合は、さう簡單にはゆかない。

日本としても別にその領土に對する野心があるわけではないし、フィリッピンとしても恐らく戦争がして見たいわけでもあるまい。そこは何とか話し合ひを付けて、相互になるべく餘計な眞似をしないですむやうにしたいのだ。

日本がフィリッピンに關心を有たざるをえない所以は、そこがアメリカの西太平洋作戦の基地となる虞れがあるからだ。従つて、その虞れさへなくなれば、日本は何等フィリッピンの存在に關心を有つことなく、快くこれと交際し、快くこれと貿易して、極力その中立を尊重し、將來における大東亞新秩序の建設に對して、衷心からその協力を求めることが出来る。

殊に、大統領ケソン自身でさへ、自國の防備に對して自信がなく、日本軍ひ

とたび來攻すれば、ただちにその蹂躪するところとなるに相違ないと思つてゐるのだから、必敗の數明かな戦争を敢てし、平和な自國の山河をして、いたづらに兵塵の巷たらしめることは、何といつても智慧のある遣り方ではない。果して然らば、當時のフィリッピンとして、當然なすべき任務は、みづから進んでアメリカと交渉し、自國の立場をして、純然たる中立國の地位に置くことではなければならぬ。

周知のごとく、六年後の一九四六年になると、タイディングス・マクダファイ法の定めるところによつて、アメリカの領土たるフィリッピンは、完全な獨立國となるのみならず、それと同時に、フィリッピンにおけるアメリカの軍事的地位も、全然これを放棄することになつてゐるから、フィリッピンそのものに對して、アメリカは何等執着を有つてゐるわけではない。

さすれば、フィリッピンからアメリカに對して交渉し、具さにその窮狀を懇へて、アメリカが戦争のためにこれを利用せざらんことを哀願すれば、充分そ

フィリッ
ピンの窮
狀

のへんの事情を承知してゐるアメリカとしては、多少の條件を提出することによつて、あるひはその哀願を容れないとも言へぬ。

尤も、アメリカがフィリッピンそのものに對して、何等執着を有つてゐないにしても、これを戦争に利用することによつて、非常な便益を得るといふ見込があれば、アメリカは斷じてフィリッピンの哀願を容れないであらう。

しかし、フィリッピンを利用することによつて、さし當りアメリカの受ける便益は、アメリカ艦隊のマニラ移駐が行はれないかぎり、すこぶる制限せられたいもので、いはば貿易破壊戦に従事する潜水艦の基地たる役目を受持つ程度のものに過ぎない。しかもそれさへ永く繼續する見込はなく、日本軍のフィリッピン攻略とともに、即時その役目を受持つことも出来なくなるのだから、アメリカが眞にフィリッピンの獨立を希望し、その將來における發達を顧念するものであれば、アメリカは當然フィリッピンの哀願を容れ、その中立的地位を擁護すべきものであらう。

フィリッ
ピンの獨
立

アメリカが、假にフィリッピンの哀願を容れ、その中立的地位を擁護するものとすれば、その際アメリカの提出する條件は、果してどういふものであらうか。

先づ第一に豫想されることは、アメリカがこれを軍事的に利用せざるかぎり、日本もまたこれを利用してはならぬといふことであらう。勿論これは理の當然で、アメリカがさうする以上、日本も公明にフィリッピンの中立的地位を認め、且つこれを尊重しなければならぬ。第二に豫想されるアメリカの條件は、現にフィリッピンに駐屯または碇泊してゐる軍隊または艦艇の中、アメリカがこれを本國またはその他の地點に移動させたいと思ふものは、日本がこれに何等の攻撃をも加へず、原則としてその自由な行動を許すといふことである。日本が強ひてフィリッピンに兵を用ゆることを欲しないかぎり、これもまた止むをえないことであらう。

しかし、以上述べたところは、徹頭徹尾私の机上の論であつて、果してそれ

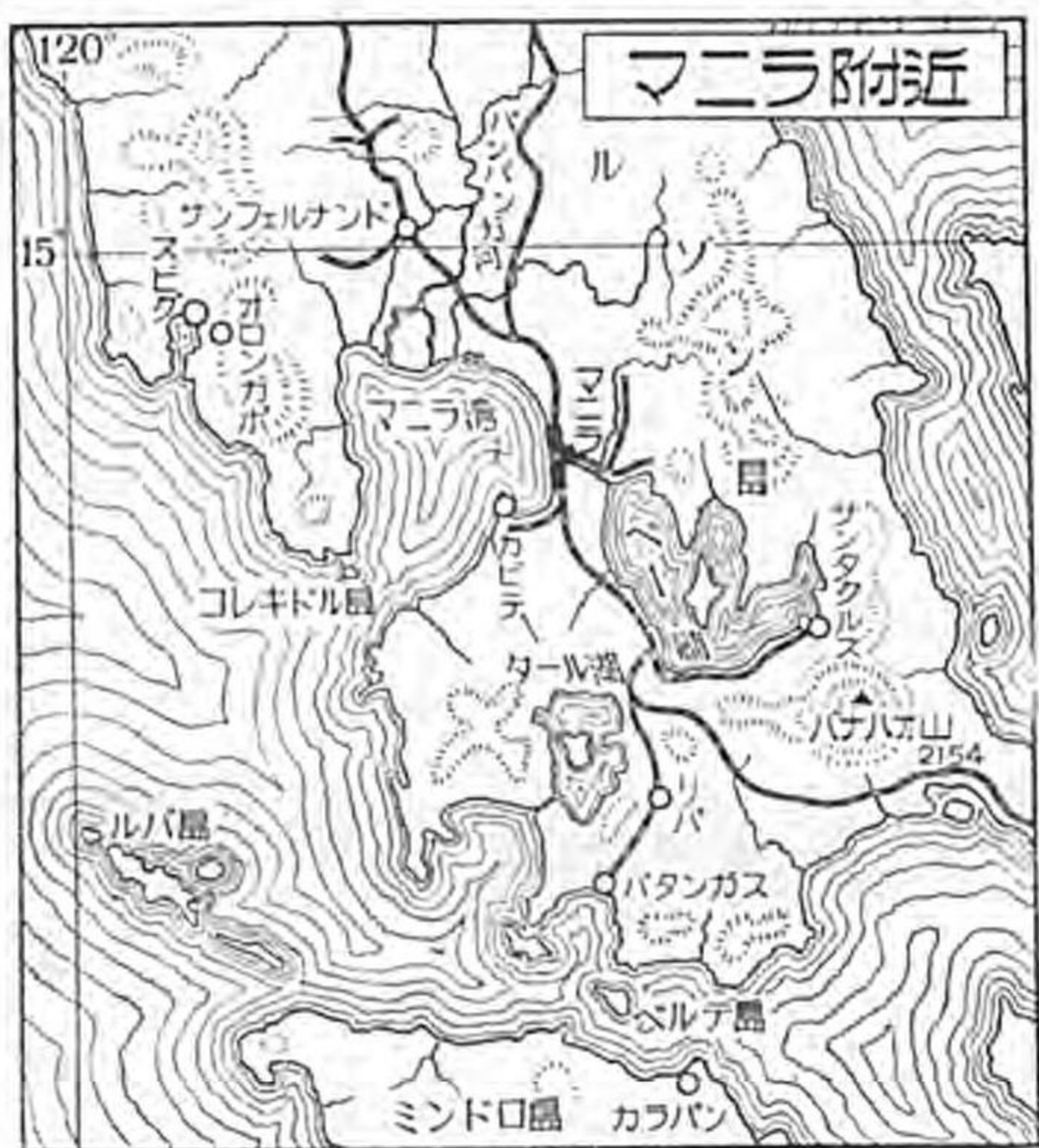
アメリカ
の條件

が實現するかどうかは判らない。日本としては、かかる場合に遭遇した時、一應情理を盡してフィリッピンを説き、なるべくさうさせるやうに努むべきではあるが、假にそれがさうならなかつたからといって、別に失望するには當らない。日本の實力は、優にフィリッピンにおける障礙を除き、これを自己の欲する地位に置くことが出来るからである。

私は既に十一年前の舊著において、フィリッピン攻略問題を取扱ひ、これに對して頗る詳細な説明をしてゐるのみならず、本書の第八章においても、稍詳しくその問題に觸れて置いたから、ここではすべてを省略して、何事も言はないことにする。これを要するに、日本が眞にフィリッピンを攻略しようと思へば、それはむしろ易々たることである。しかし、大東亞の新秩序を建設することによつて、そこに如何なる國々をも、それぞれ處を得せしめたいといふ日本現在の立場からいふと、たとへ止むをえざるに出たこととは言へ、未だ發達の過程にある將來の善隣に對して、輕率に兵を送つて戦ひを強ひるといふこ

攻略は易
易たる問
題

フィリッ
ピン攻
略



とは、出来るだけこれを避けた方がよからうといふに過ぎない。

従つて、フィリッピンが依然としてアメリカの軍事的據點となり、我が國が絶対にこれを黙視しえない地位に置かれた時は、わざわざ兵を送つてこれを攻略しなくとも、我が強力な空軍は、よく與へられた任務を果すであらう。

例へば、カウイテまたはオロンガポに、アメリカの潜水艦が巢喰つて、絶えず日本の南方航

空軍によ
る比島制

路を攪亂するとする。その際、日本は何も多大の犠牲と努力とを拂つてカヴィ
テまたはオロンガポーを占領する必要はない。これに強力な空軍を送つて、片
つ端からその軍事施設を破壊し、且つ潜水艦を爆撃したら、彼等は結局そこに
居たたまれなくなり、そこでそのまま寂滅して終ふか、または脱出して本國に
逃げ去るであらう。劣勢な水上艦艇に至つては、素より多くこれを問題にする
必要はない。フィリッピン駐屯の空軍にしても、これは勿論我が空軍をもつて
制壓することが出来るから、よくよくの場合が起らないかぎり、日本は成るべ
く兵を用ひないことにするであらう。臺灣は、その際における空軍基地として、
まつたく理想的な地位を占めてゐる。

濠洲と蘭領印度

太平洋戦争の場合、稍フィリッピンと類似した地位に置かれるものは、英國

の僚邦たるオーストラリアである。

英米兩國は、勿論オーストラリアを誘惑して、これを戦争の渦中に引摺り込
み、それによつて直接間接に便宜を得ようとするであらうが、日本とフィリッ
ピンとのあひだに、何等戦はなければならん理由がないと同様、日本とオース
トラリアとのあひだにも、何等戦はなければならん理由はない。

神經過敏なオーストラリア人たちの中には、日本で發行した世界地圖の中に
は、濠洲の委任統治領たるニューギニア、および濠洲の領土たるノーザン・テ
リトリーが、日本と同色に塗られてゐるなどといつて騒いでゐるものもあるが、
物の判つた日本人たちの中に、眞面目になつてさういふことを考へてゐるもの
が、果して一人でもあるだらうか。理由なくして日本を敵視することは、オー
ストラリア人が疑心暗鬼を描いた結果に過ぎない。

さすれば、日本と英米兩國とが戦つたからといつて、無關係な地位にあるオ
ーストラリアは、何も慌てふためにその片棒を擔がなければならん理由はな

濠洲人の
神經過敏
性

い。

オーストラリアにはオーストラリアの立場があるであらう。ちつと黙つて戦争の成行を見ながら、日本と貿易がしたければそれをするもいし、アメリカと貿易がしたければそれをするもいし。自己の意志と危険とにおいてすることなら、オーストラリアは何でも出来る地位にゐる。日本とアメリカまたは英國とが戦争をする場合、オーストラリアがぜひともそれに飛び込まなければならぬやうな顔付をしてゐるのを見て、私はいつも不可解なことだと思つてゐる。しかし、かやうに言つたからといつて、日本は何もオーストラリアの参戦を怖がつてゐるのではない。オーストラリアの地位は、日本の有つべき外郭防禦線の彼方にあつて、いはば日本の死活に關する海面の外に立つてゐる。オーストラリアの海軍は、それ自體特に問題にしなければならぬほどのものでもないし、オーストラリアの海軍根據地は、よしそれをアメリカまたは英國が利用したとしても、唯一のダーウキン港を除く外は、いづれも遠く南方に隔絶して

ゐるから、それが我が國に與へる脅威は、よほど間接的な性質のものとなり、あまりこれを氣に病むことはない。それに較べると、フィリッピンのカヅイテおよびオロンガポーは、あたかも南支那海の航路を監制する地位にあるから、日本も全然これを無視するといふわけにはゆかぬ。

従つて、太平洋に戦争が勃發した場合、オーストラリアがこれに参加したからといつて、日本は強ひてその相手になる必要はない。彼をして、彼の欲するがままになさしめよ。オーストラリアが、たとへ全力を擧げて狂奔したところで、それが現實に我が國の作戦行動の上に及ぼし得る影響は、きはめて微々たるものに過ぎないであらう。もし我が國の寛容に慣れて増長したオーストラリアが、ファン・ドイーマン灣またはビスマーク群島のある港灣、——例へばラポール港でも割いて英米に提供し、彼等がこれを奇襲艦艇の根據地として利用するやうなことがあれば、日本はこれに對して執るべき適當な方法もあるし、進んでオーストラリアを懲罰するためには、さらにより一層適當な方法がある

であらう。

残るところは蘭領印度であるが、バタヴィアからの報道によると、蘭領印度政府は、最近陸海軍豫算として總額二億九千五百萬ギルダを支出し、且つ土人徴兵制まで實施して、大いに防備強化に努めてゐるといふことだ。しかし、シンガポールが陥落した以上、それはすでに半身不隨の状態になつたも同様であるから、特に日本がこれを説得しないでも、蘭領印度總督は、欣んで日本の要求に應じ、蘭領印度艦隊は、みづからその武装を解除するであらうし、日本の必要とする地點に對しては、唯々として日本軍の駐屯を承認するであらう。

吾人は獨り石油のみならず、砂糖を必要とし、護謨を必要とし、米穀を必要とし、珈琲を必要とし、キニーネを必要とし、カボックを必要とし、錫を必要とし、パラフィンを必要とする。日本の勢力範圍に置かれた蘭領印度の諸島嶼は、日本をして戦争繼續に必要な物質のすべてを獲得せしむるのみならず、絶對にアメリカ艦隊の東航を阻止し、太平洋戦争における日本の戰略的地位をし

蘭領印度
の重要性

て、あたかも泰山富嶽の安きに置き、三年や五年は愚か、九年は十年でも、まかり間違へば、二十世紀における百年戦争でも、優にこれをなし得る地位に置くであらう。

樂天家のスターリング少將は、どう勘違ひをしたものか、鑛物の天國ニューカレドニアをもつて、當然アメリカの勢力範圍に屬するものとし、それをホルルからシンガポールに至る聯絡線の一支點として考へてゐる。

日本はたとへ多少の犠牲は拂つても、絶對にこれを英米兩國の手に委ねるやうなことはあるまい。長さ二百四十八哩、幅員平均三十一哩、面積七千六百五十方哩の本島は、その地下に、クロームをはじめ、コバルト、アンチモニー、水銀、辰砂、銀、鉛、銅、石炭、および金を包藏し、特に東海岸地方のニツケル鑛に至つては、カナダのスンドブリーとともに、世界における二大産地と稱せられ、そこには現に邦人勞働者の多數が渡來して、日夕その採掘に従事してゐる。さういふ因縁からいつても、我が國はぜひともこれを自國の手に收めな

スターリ
ング提督
の誤算

ければならぬ。

ニューカレドニアとオーストラリアとの距離は、約七百海里であるが、蘭領印度の東端とニューカレドニアとの距離は、約千四百海里である。後者は、あたかも前者の二倍に當つてゐるが、日本の強力な海軍力は、よくオーストラリア艦隊の蠢動を排して、確實にこれを維持することが出来るであらう。幸ひにも、フランス領たるカレドニアは、目下ド・ゴール政権の支配下に隸屬し、陰に陽にオーストラリアの援助を受けて、正面から三國同盟に楯付く立場をとつてゐる。我が國がこれを攻略したところで、何等差支へることはない。殊に、本島の首都ヌメアは、人口一萬餘を有し、南太平洋屈指の良港であつて、六百ヤードの波止場と、一個の乾船渠と、小艦隊の錨泊に適する諸般の陸上設備とを有つてゐるから、我が國がこれを占領した暁においても、何等不便を感じることはないと思はれる。

以上をもつて、ほぼ我が國の第二次作戦は完了する。然る上は、布哇におけ

るアメリカ艦隊の勢力に抗して、極力我が戰略海面の安全を確保するために、吾人は、吾人に許されたすべての方法と手段とを盡し、彼をして一步も乗する隙を與へないやうにすればいい。

第十二 貿易破壊戦

米國の潜水艦戦

日本が豫定のごとく第二次作戦を終つてしまふと、それで日本はもはや爲すべきことの大部分を終り、それ以上何處をどうしなればならないとか、何處にどれだけの戦争を計畫しなければならぬとかいふやうなことはなくなつて来る。従つて、それから以後の日本は、純然たる攻勢防禦の態勢を執り、アメリカ側の仕掛けを待つて、それに必要な處置を講ずることにすればいい。

日本が機敏に開戦の時期をつかみ、いはゆる電撃的行動によつて、その第一次および第二次の作戦を終ると、真珠灣にゐるアメリカ艦隊は、もはや遠距離

封鎖の作戦を行ふことも出来ず、それかといつて、輕率に日本に對する進攻作戦を行ふことも出来ないから、いはば太平洋の真中に立往生をした形で、むしろその進退に窮するであらう。

ジョン・ガンサーは、この時期におけるアメリカは、その航洋潜水艦を西太平洋に送つて、極力日本の通商を妨害するといつてゐる。それは勿論出来ない相談ではないし、またそれを花々しくやられたら、日本もかなり苦しむ場合があることとは思ふが、いくらアメリカに都合よく考へて見ても、單に航洋潜水艦による通商妨害だけで、簡単に日本が屈服するものとは思へない。

アメリカの潜水艦中、太平洋を横斷して東支那海または南支那海に進攻し、そこで思ふ存分あばれまはつた揚句、ふたたびもと来た道を引き返して、自己の根據地たる真珠灣に歸投することが出来さうなものは、V級九隻の外に、目下建造中または艦装中のものまで加算して、總數廿四五隻はあるであらう。それらの航洋潜水艦は、いづれも排水量一千噸以上のものばかりで、中にはナウ

チラスおよびナルワールのごとく、排水量二千七百三十噸で、しかも六吋砲二門を装備してゐるやうなものもあるから、決して輕視するを許さない。

處によつて多少の相違はあるが、眞珠灣からアジアの東海岸および蘭領印度の諸島に至る距離は、大體五千海里乃至六千海里のあひだにある。従つて、航續力一萬海里以上を有する潜水艦は、南はアラフラ海またはバンドラ海から、北は東支那海または日本海に至るまで、すべて彼等の行動圏内に包容されて終ふから、我が國の沿岸航路は勿論、我が國の西方航路および南方航路のすべては、いづれもアメリカ潜水艦の活動區域となり、戦時における我が海上交通は、非常な脅威に曝されることとなるであらう。

殊に、我が國の機敏な行動によつて、アメリカの豫定してゐた作戦が、ことごとく失敗に歸したといふ場合は、彼は當然その全力を擧げて貿易破壊戦に集中し、それによつて日本を窮乏せしめようとするに相違ないから、かかる場合に對して、我が國は豫め充分な準備を整へて置かなければならぬ。

昨年十一月廿七日、英國のグリーンウッド無任所相は、最近におけるドイツ潜水艦の活動によつて、英國は恰度一九一七年四月におけると同様な最悪の事態に當面したと發表した。

それが果して事實であるとするれば、——そしてそれはまたたしかに事實であるに相違ないが、最近におけるドイツ潜水艦は、月額九十萬噸前後の船舶を撃沈してゐるらしい。飛行機の爆撃は、一見頗る派手でもあるし、且つ威嚇的な効果を收めることは出来るが、英國のやうな地理的條件を備へてゐる國に對しては、それよりも、むしろ潜水艦の方が、はるかに大きな打撃を與へるものやうだ。チャーチル首相が、半ばおどけた口吻で、俺は飛行機よりも潜水艦の方が怖いといつたのは、決して偶然だとは言へない。

英國と同様に、我が國も島國であるから、當然海路によつて多量の物資を輸入しなければならぬのみならず、第一次および第二次作戦の結果として、多數の兵力を海外に送つてゐるものとするれば、それらの軍隊に對する補給を行ふ

上からも、我が國はぜひともその海上交通路を確保しなければならぬ立場に置かれてゐる。

にも拘らず、アメリカ潜水艦の活動によつて、それが假にも現在の英國におけるがごとき状態となり、寸時もその海上交通路を確保することが出来ないやうな事になつたら、それはよし、致命的ではないにしても、それによつて我が國は非常な損害を蒙り、自後の作戦を繼續して行く上に、あるひは不測の障害を感ずるやうなことがないとも言へない。

尤も、ドイツが英國に對してなしつつある潜水艦戦と、アメリカが日本に對してなすことあるべきそれとは、よほどそのあひだの事情が違つてゐる。

日本の貿易路を破壊しようとするアメリカの潜水艦は、嫌でも五千海里乃至六千海里の長航程を突破して、然る後自己の欲する戦場を擇ばなければならぬ。これに反して、現に英國の貿易路を破壊しつつあるドイツの潜水艦は、その北方航路に對してはノールウェーの海岸から、その南方航路に對してはアラ

ンスまたはベルギーの海岸から、恰度眼と鼻とのあひだにある戦場に飛び出し、しかも英國の玄關先ともいふべき海面に待ち伏せをして、思ふ存分あばれ廻つてゐるのだから、前後兩者の場合を比較すると、その任務を遂行する上の難易においては、ほとんど天地霄壤も管ならん相違がある。

日本潜水艦の任務

しかし、潜水艦戦によつて敵を苦しめる點においては、日本もをさをさアメリカに負けをとるやうなことはあるまい。

さし當り三十幾隻かの伊號潜水艦は、この重大な任務に服するわけであるが、その任務の性質を分けて見ると、一つは、アメリカ本國の太平洋における貿易を破壊することであり、今一つは、アメリカ本國と、その前進根據地たる布哇群島との連絡を遮断することである。

太平洋に戦争が勃發した場合、アメリカとアジアの東海岸および南洋諸島との貿易は、當然停止する運命にあるから、それについては別に何も考へて置く必要はない。

しかし、アメリカとオーストラリアおよびニュージラランドとの貿易、アメリカとカナダ、メキシコ、および中央アメリカ諸國との貿易、およびアメリカと南米諸國との貿易は、原則としてこれを繼續し得る立場にあるから、アメリカの貿易破壊を目的とする日本潜水艦は、否でも東太平洋の海面に進出して、その任務に服さなければならぬ。

尤も、カナダおよびメキシコのごときは、アメリカとのあひだに鐵道聯絡があり、中央アメリカの諸國は、アメリカとのあひだにメキシコ灣およびカリビア海を経由する海上聯絡があるから、アメリカの貿易路を遮断せんとする日本潜水艦にとつて、もつとも希望多く、且つもつとも重要な貿易路は、アメリカと南米諸國とを聯絡する航路、およびアメリカとオーストラリアおよびニュー

アメリカの
貿易路の
破壊

ジラランドとを聯絡する航路でなくてはならぬ。

假に伊號潜水艦の幾隻かが、北緯三十度の線に沿うて、西經百二十度乃至百四十度のあひだを往返し、絶えずアメリカに向ふ航路を監視してゐるとしたら、その結果は果してどうであらう。

アメリカの西海岸からメキシコ以南に達する航路は、恰度西經百二十度において北緯三十度の線を通過し、同じくアメリカの西海岸から、オーストラリアおよびニュージラランドに達する航路は、恰度西經百四十度において北緯三十度の線を通過するから、北緯三十度の線に沿うて、西經百二十度乃至百四十度のあひだを往返してゐる幾隻かの伊號潜水艦は、一方においては、アメリカとメキシコ以南との貿易路を遮断し、他方においては、アメリカとオーストラリアおよびニュージラランドとの貿易路を遮断し得る地位に置かれてゐる。

それと比較すると、日本本土とアジアの沿岸および南洋方面とを聯絡する航路は、すこぶる複雑多岐を極め、ウラヂオおよび北鮮地方の諸港へは、日本海

アメリカの
太平洋の
航路

を通ずる航路があり、北支および滿洲國の諸港へは、東支那海を通ずる航路があり、南方アジアおよび蘭領印度の諸港へは、臺灣海峡およびバシー海峡を通ずる航路があるのみならず、さらに兩海峡の何れをも通過せず、マカツサル海峡またはモルツカ海峡を経由して、直接フィリッピン海溝に沿うて北上する航路があるといふ風だから、アメリカの西部海岸と同様、ある限局された一部の海面のみを監視することによつて、簡単にその主要航路のすべてを遮断するといふわけにはゆかない。

マーシャル群島中のある一島から、アメリカの西部海岸に至る距離は、せいぜい四千海里前後のものだ。航続力一萬海里を有する日本潜水艦は、優に金門灣頭またはロサンゼルスの港外に達することが出来るであらう。若し假に日本潜水艦の航続力が、一萬海里以上一萬五千海里にも達するやうであれば、それはアメリカとオーストラリアおよびニュージージーランドとを聯絡する航路を遮断して、遠くパナマ運河の前面に迫り、そこを通過する總ての船舶に對して、無

遠慮に魚雷または砲彈を見舞ふことが出来るであらう。

潜水艦による貿易破壊戦を行ふ點においては、布哇に據るアメリカの潜水艦よりも、マーシャル群島に據る日本の潜水艦の方が、はるかに有利な立場を興へられたことになる。

アメリカ本國と、布哇群島との聯絡を遮断しようとする日本潜水艦は、なにもアメリカの太平洋沿岸近くまで出かけてゆく必要はない。その出帆地が、たとへシアトルであらうと、サンフランシスコであらうと、ロサンゼルスであらうと、サンチエゴであらうと、乃至パナマであらうと、苟くも布哇群島に向はんとする船舶は、いづれも同一の目的地に向つて集中して來るのだから、これを邀撃せんとする日本潜水艦は、ダイヤモンドヘッドの岬角附近をはじめ、間断なく布哇群島の東方海面さへ監視して居れば、彼等是否應なく日本潜水艦によつて発見され、必ずやその攻撃を受けることになるであらう。

前進根據地としての布哇が有する脆弱點は、その他にも尙ほ多數にあるが、

私はこの點をもつて、その最大なものだと思つてゐる。

マーシャル群島中の一島と、布哇群島との距離は、わづか二千海里未滿のものに過ぎない。日本潜水艦の幾隻かが、絶えずそのあひだを往返して、入り換り立ち換りこれを監視するといふことになる、ひとりその本國との聯絡を脅かされて、一種の孤立的状態となるのみならず、真珠灣、カネオヘ灣、イロイロ港その他の港灣に錨泊してゐるアメリカ艦隊は、ことごとくにその行動の自由を阻害されて、活潑な機能を發揮することが困難になるかも知れぬ。

敢て最悪の場合を想像すると、布哇におけるアメリカ艦隊は、絶えず日本潜水艦の包圍するところとなつて、軍需品その他の必要物資は缺乏し、艦隊乗員の士氣は沮喪し、あたかも麻痺的症狀を呈するやうな事態の下に置かれるかも知れぬ。

元來、戦時における主力艦隊の所在地が、完全にその相手方の知るところとなつてゐるといふことほど、厄介千萬なものはない。相手方は、絶えずその艦

アメリカ
艦隊の
苦痛

布哇群島
のアメリカ
艦隊

隊の動靜を偵知し、その一舉一動に對してさへ、常に監視の眼を注いでゐる。

奇襲艦艇は、いつもその根據地近くをうろついてゐて、些少の隙でも見つかつたら、すぐ襲撃を加へる。外界との交通聯絡は、つねに脅威されがちで、すこしも安心して行動をすることは出来ぬ。かかる状態に陥つては、到底有効に活動することが出来るものではない。布哇群島のアメリカ艦隊におけるは、恰度さういふ條件の下に置かれてゐるのだから、真珠灣そのものの防備や施設などが、たとへどの程度に立派なものが出来上つて居らうと、それはそれ自體において、すでに戦時における大艦隊の根據地たる資格はないと言へるであらう。これに反して、戦時における我が國の主力艦隊は、果して何處にゐるか判らない。

あるひは横須賀軍港に居る場合もあらうし、あるひは伊勢灣にゐる場合もある。瀬戸内海の奥深く潜伏して、懸命に戦技訓練をやつてゐる場合もある。たうし、事と場合によつては、奄美大島の古仁屋灣に移動して、何か畫策して

ある場合がないとも言へない。この程度の範囲内を動いてゐるのなら、たとへ如何なる港灣に居らうと、さあ、いよいよといふ場合になつても、その必要な戦略海面に移動する上には、ほとんど何等の支障をも感じない。

假に、その戦略海面が、小笠原島の附近であつたとしても、横須賀からそこにゆくのも、伊勢灣乃至瀬戸内海からそこにゆくのも、さらに奄美大島の古仁屋灣からそこにゆくのも、いづれもほとんど等距離にある。命令一下すると同時に、各所に分散してゐた艦隊は、まつたく時を同じうして、そこに集合することが出来る。従つて、戦時における日本艦隊は、ひとりその所在地を秘密にすることが出来るのみならず、その所在地を分散することさへ出来るから、きはめて限局された布哇群島の各島嶼に、ほとんど一團として集結するより外に道のないアメリカ艦隊に較べると、いかほど有利な地位に置かれてゐるか判らない。

有利な地位に置かれる日本艦隊

米國の共同防衛計畫

以上の説明によつて、戦時における日本潜水艦の任務は、ほぼこれを理解することが出来たと思ふが、さて然らば、日本潜水艦は絶対にそれ以上の海面へは赴かず、ただアメリカ太平洋沿岸および布哇群島附近の海面のみに集中して、その任務を遂行するに過ぎないかといふと、私は必ずしもさうは思はない。

假に、日本潜水艦中のあるものに、航続距離一萬五千海里以上に達するものがあるとするれば、——さうしてそれは何となくあるやうに思はれるが、マージナル群島中の一島から出發した日本潜水艦は、太平洋を斜に横断して、優に南アメリカの海面に到達することが出来る。アメリカと南米諸國との貿易路を破壊するには、なにも北緯三十度の線に沿うて、一つ覺えに西經百二十度乃至百四十度のあひだのみを彷徨してゐる必要はない。長驅パナマの灣頭に迫つて、

日本潜水艦の遠征

左にマタの岬角を見、前にアーク・ド・ラ・バールスの島影を望みながら、そこに輻輳し来る無数の船舶に對し、容易にそのなさんとするところをなすことも出来るであらう。

かかる着想は、すでにアメリカ海軍の頭腦をも刺戟してゐるものと見え、三國同盟の成立前後から、アメリカ政府は、しきりに南米諸國との共同防衛なるものを議し、その計畫の大半は、すでに成功を告げてゐるらしい。尤も、かかる計畫は、最初は主としてドイツを目標とするものであつたが、今では日本をも目標とし、太平および大西の兩洋に互つて、いはば完璧な防衛陣を展開することになつた。

新聞紙の報ずるところによると、ブラジルにおいては、ペレムに海軍基地。マナオスおよびバレイラに空軍基地。ウルグアイにおいては、同國の南端ブント・デル・エステに軍事基地。チリーにおいては、バルパライソ附近に軍事基地。——以上が、それぞれアメリカに提供せられることに決定したといはれ、メキ

日本を目
標とする
完璧な防
衛陣

シコおよびアルゼンチンも、汎米防衛計畫の一環として、自國の海軍基地をアメリカに提供し、これと共同使用する方針だけは決定したといはれてゐる。近くペルーその他もこれに加はると思はれるが、全然敵の視覚を奪ひ去つて活動する潜水艦の貿易破壊戰に對し、それが果してどの程度の役に立つかといふことは、すこぶる疑問だといはなければならぬ。

アメリカが、驅逐艦五十隻分讓の代償として、大西洋における英國の海空軍基地たるニューファウンドランド、バミューダ、バハマ、ジャマイカ、セントルシア、トリニダット、アンティグア、および英領ギアナの各地を租借したのは、昨年九月二日のことであつた。

それ以來、アメリカにとつて最も大きな戦略的價値を有するバミューダ島のごときは、早くも五千人からの土工その他が送られて、海軍基地たるキャツスル港の内灣をはじめ、空軍基地たるロングバード島や、ウォリックおよびリッデルス灣などに於いて、すでに素晴らしい大工事がはじめられてゐるといふ

戦略的價
値を有す
るバミュー
ダ島

ことだ。しかし、一種の戦争恐怖症に罹つてゐるアメリカとしては、またそれだけでは安心が出来ないものと見え、終に南米諸國との共同防衛案なるものまで擔ぎ出して、大騒ぎに騒ぎ立ててゐるものと見える。

樞軸國對アメリカの戦争において、吾人が最も快心に堪へないことは、英國が完全に屈服して終つた後、獨伊兩國の海軍と協力して、太平および大西洋の二海洋から、極力アメリカの通商路を攪亂し、アジア、アフリカ、およびヨーロッパとは勿論のこと、あはよくばアメリカと南米諸國との海上聯絡を斷ち切り、これを完全に孤立せしめて終ふといふことだ！

不幸にして、アメリカは、いまだ陸路による南米諸國との聯絡線を有つてゐない。ニューヨークまたはロサンゼルスからの旅客は、鐵路によつてリオ・グランデの溪谷を越え、辛くもヴェラ・クルーズの碧波を見ることは出来るが、それから先きは、太平洋または大西洋の海上航路によらない以上、絶対に一步も南へは下れない。この點に於いて、南アメリカの北アメリカにおけるは、全

南北アメ
リカの聯
絡路

アメリカ
と南米諸
國との共
同防衛案

然海洋をもつて隔離されたも同様な地位にあるから、樞軸國側の潜水艦戦によつて、もしその海上聯絡を遮斷されることとなれば、アジア、アフリカ、及びヨーロッパから隔離されたアメリカは、さらに南アメリカとも隔離されたことになるが、それが果してアメリカの耐へ得るところであるか。考へて見ると、アメリカと南米諸國との共同防衛案なるものも、まことに無理からん理由を有つてゐる。

ところが、アジア、アフリカ、およびヨーロッパの三大陸は、これを陸路によつて聯絡することも困難でないのみならず、イタリーにしてよくスエズ運河を制しえたら、これを海路によつて聯絡することも、さまで困難ではない。

殊に、英國が屈服し、地中海および印度洋の航路が安全化した曉には、アジア、アフリカ、およびヨーロッパの三大陸は、完全な一體として結合されるから、相互の交通聯絡を確保する上に、日獨伊の三ヶ國は、何等苦慮するところはないであらう。樞軸國對アメリカの戦争は、明かに舊大陸對新大陸の戦争で

あるが、その新大陸自身は、樞軸國の努力如何によつて、あるひは二つに隔離されるかも知れない危険性を有つてゐるのである。

日本に對するアメリカの潜水艦戦は、よしそれが相當な成績を擧げた場合でも、食料品を自給しえない英國などと違つて、それ自體致命的でないのみならず、これを行ふ上に困難があり、しかもその複雑多岐にわたる航路を監制することが厄介であるから、吾人は必ずしもそれを畏怖する必要はないが、最後の勝利を占める上からいふと、吾人は夢にもこれを輕視してはならぬ。

日本にも多くの弱點がある。萬一にもすでに攻略したシンガポールが孤立するとか、バクバンまたはバレンバンを出た油槽船が、いつまでも我が國の所定港に歸つて來ないとかいつたやうな事態を生ずると、それこそ由々しい大事で、なにがゆゑに多大の努力と犠牲とを拂つて第一次作戦をやつたのか、一向その理由が判らないやうなことになる。すくなくとも南支那海および東支那海だけは、絶対にこれを安全地帯たらしめ、それによつて確乎たる持久戦の基

日本にも
弱點があ
る

礎を立てる必要がある。

貿易破壊戦を強行する場合、太平洋の各所に散在する英領島嶼は、勿論アメリカがこれを利用するものだと思はなければならぬ。殊に、オーストラリア北部の諸港灣、並びに英領およびオーストラリアの委任統治にかかる東部ニューギニアの諸港灣などは、勿論アメリカによつて利用され、そこに燃料その他の貯藏が行はれる虞れがあるから、日本の南方航路を遮断せんとするアメリカの潜水艦は、それによつて多大の便宜を興へられ、一層その活動を容易にする場合のあることを忘却してはならない。

英國が依然として健在であるかぎりには、マラッカ海峡以西における日本の潜水艦戦についても、吾人は全然これを閑却して置くわけにはゆかない。しかし、それはむしろ日本にとつて有利な舞臺であつて、英國にとつては明かに受け身の立場にあるものだといはなければならぬ。假に、シンガポールを根據地とする日本の潜水艦が、ベンガル灣またはアラビア海に進出し、そこにおいて縦横

アメリカ
の利便
すべき
諸島
領す

無盡な活動をした場合、英國とインドとの聯絡は、果して如何なる慘狀を呈するか！

否、それどころではない。日本艦隊の一部が、軸體相啣んでガンジス河口に薄り、さなくとも不安と動搖との裡にあるインドに對し、一種の示威的行動を試みたとしたらどうか。問題はさらに問題を生んで、ほとんど極るところを知らないが、私は敢てこれ以上論究しないことにする。

第十三 可能と不可能

日本空襲の夢

太平洋戦争における日本の立場は、きはめて簡單明瞭である。

我が國は、相手方のアメリカに對して、何も大した要求を有つてゐるわけではない。布哇群島を頂きたいとか、ワシントンやカリフォルニアの諸州をよこせ、とか言つてゐるのではない。相手方のアメリカが、我が國の成さんとする大東亞新秩序の建設を認め、これに對して何等の妨害をもしなければ、それで吾人は欣んでアメリカと手を握り、航海者マゼランによつて發見された太平洋をして、いつまでも命名者の好意に背かないやうな平和の海洋たらしめて置くこ

とが出来るとだ。

従つて、アメリカと戦ふ場合の日本は、堅く自分の繩張りを固め、それによつてアメリカの侵害を防ぐことさへ出来れば、それ以上何も進んでしなればならないことはない。相手方の戦争意志を挫折させるためには、みづから積極的に出て戦ふ必要もあるが、戦争そのものの目的から言へば、退いて堅く自分を守り、アメリカが假令如何なる手段をもつて迫つて來ることがあらうと、それによつてびくともしないだけの態勢を維持してゐれば、それで充分戦争の目的は達してゐるのである。

日本は退いて堅く自分を守るとともに、餘力の全部を擧げて、東亞および南方の經營に當り、ひとり長期の戦争に堪へ得る實力を養ふのみならず、進んで戦争後における素晴らしい發展に備へなければならぬ。

大東亞新秩序の建設は、ただ机上の論や計畫だけで出来るものではない。土地はこれを開發しなければ不毛の沙漠と異るところはないし、富源はこれを利

東亞および南方の經營

用しなければ何の寄與するところもない。たとへ戦時であるからといつて、吾人は寸時といへども平和の建設を怠るわけにはゆかぬ。

當の相手方たるアメリカは、さういふ落着きはらつた態度はとつてゐられない。ひとたび日本と一戦を交へる覺悟を決めた以上、何とかして日本のその首を押へつけ、日本をして眼に物を見せて呉れなければならぬ。

しかし、何とかするといつて見たところで、さう無暗矢鱈に澤山することがあるわけではない。近距離封鎖は夢の中の夢、遠距離封鎖も結局駄目と決つたら、アメリカはさてどうするか。唯一の戦争方法ともいふべき貿易破壊戦は、相變らずこれを續けて居り、時には相當の獵獲を擧げることがあるにしても、それだけでは到底日本を參らせることが出来ないと判つたら、アメリカはぜひとも他に何か適當な戦争方法を發見しなければならぬ。

そこで考へられるのが、當然日本に對する空襲計畫だ。

しかし、それについても私はすでに説明して置いた。太平洋は廣い。いはば

日本に對する空襲計畫

宏大無邊な大海洋だ。いはゆる大圏コースを辿つても、アメリカの西海岸から日本まで来るには、尙ほ四千五百海里以上の航程を辿らなければならぬ。何とかいふ飛行家は、絶好のコンディションの下において、それをどうやら翔び越えることだけは出来たが、それは決して常態ではない。

リンドバークほどの卓れた飛行家でも、アメリカのワシントンから日本まで来るのに、カナダのムースファクトリその他二三個所で着陸し、さらにアラスカのアクラウイックその他一二個所で中継をし、それからカムチャツカのカラギンスキおよびペトロバウロフスクを経、絶好の天気具合を計つて、やつと我が國の根室まで辿りついて来たのだ。爆弾を積んだ飛行機が、アメリカの本土から翔び出しても、我が國の都市を空襲するためにやつて来るなどといふことは、勿論考へて見る必要もない。

さすれば、布哇はどうか。それも駄目だ。ミッドウエーはどうか。それも駄目だ。もつとも可能性があるのは、アリューシアン群島の西端アツチュと、布

哇の西方約二千一海里のところにあるウエーキ島とだが、それでも尙ほ日本との距離は、前者で約千七百海里、後者で尙ほ二千六百海里であるから、これもまた駄目だといふ外はない。残るところは、ただ一つフィリッピンであるが、それも我が長崎を距ること約千三百海里であるから、せいぜい臺灣を襲ふぐらゐなもので、到底我が本土まで羽翼を伸すことは出来ぬ。

私がかういふと、先天的に苦勞性に生れついた人たちの中には、またアメリカの飛行機を懸念して、でも航空母艦で来たかどうかといふ質問を發する人もあらう。

それなら来ることは來られるに相違ないが、その代り日本艦隊に撃沈される覺悟で來なければならぬ。假に、幸運にして日本艦隊の眼を掠めえた場合でも、我が國には多數の陸海軍機がこれを待ちうけてゐるはずだから、よし一隻や二隻の航空母艦が来たところで、それが果してどの程度の活動をなし得られるか、たしかに疑問中の疑問だと言へるであらう。

勿論、日本征伐の手段に窮したアメリカは、種々の企てをやつて見ることであらう。

しかし、彼がいくら無い智慧を絞つて、いろいろの手段をつくして見たところで、あせればあせるほど、無残な失敗を繰返すばかりで、絶対に不可能なことは、やはり不可能に決つてゐる。萬策盡きた後、彼が最後に到達する決論は、おそろくつぎのやうなものではあるまいか。

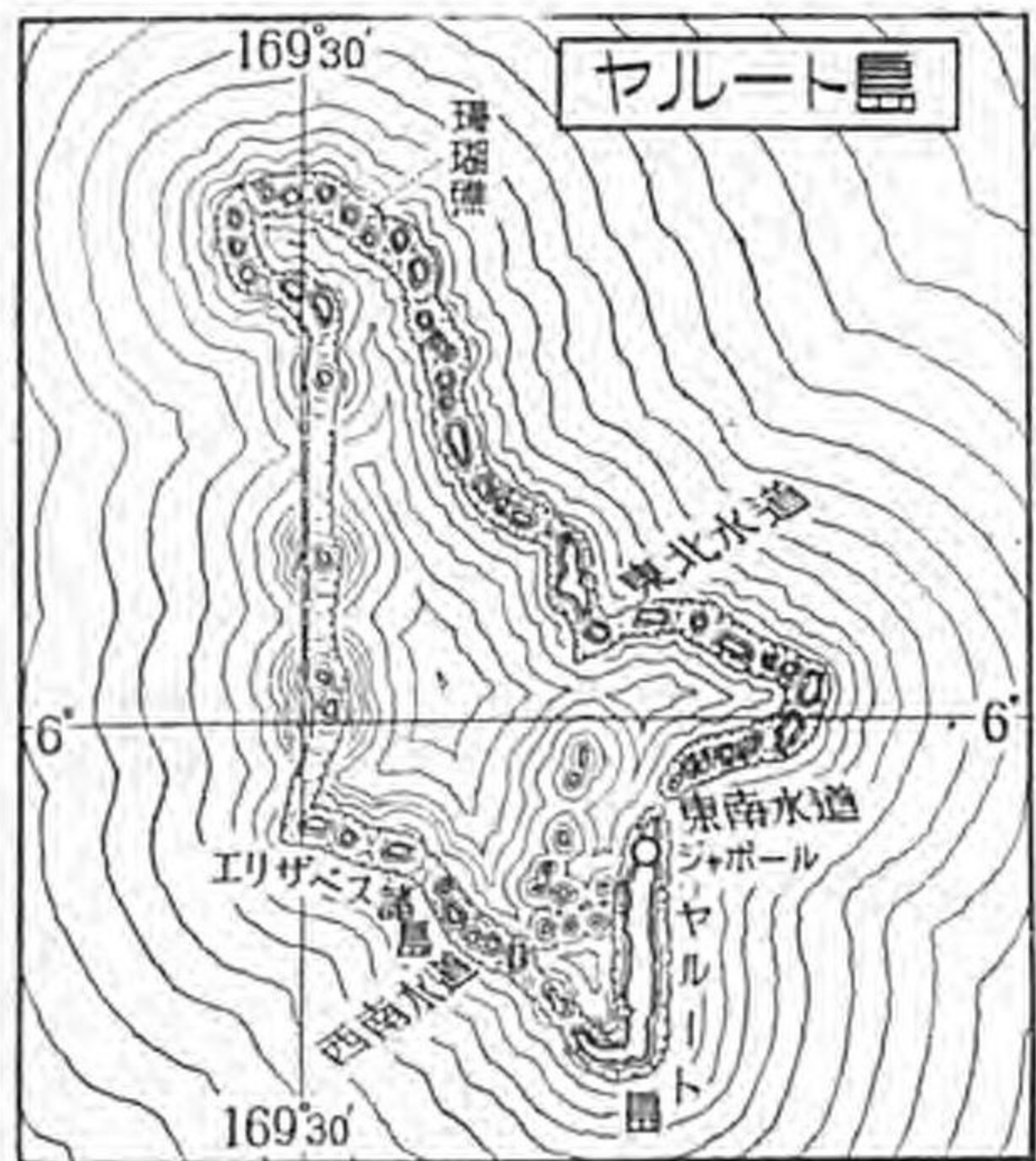
米國の窮策

アメリカは考へる。——これでは駄目だ。やはり大艦隊を日本の近海に送つて、日本艦隊と一戦を交へ、それによつて何とか窮通の道を見出さなければならぬ。しかし、それを遣るには、何としても日本の委任統治諸島が眼障りだから、その中の眼星しいものの三四だけでも、せひこれを自分の方へ奪ひ取らな

日本委任
統治諸島
の奪取

ければならぬ。

これはかつてヘクター・バイウオーターの到達した決論であり、かねて近くジョン・ガンサーの到達した決論である。苦し紛れにやつた無謀な作戦の結果、



ほとほと困じ果てたアメリカの提督たちが、廻り廻つた後、やはり彼等と同様な決論に出會はしたとしても、私は別に不思議には思はない。よろしい。アメリカの提督たちよ。やれるものなれば、立派にそれをやつて見るがいい！
彼等は先づ最初にヤルート島にでも手を着けることにし

ヤルートの
島の地位

たものと考へよう。

真珠灣とヤルート島との距離は、約二千一百海里であるから、これを攻略しようとするアメリカ艦隊は、相當有力な一支隊を割いてこれに送り、多少の陸兵をも連行しなければならぬ。然るに、ヤルート島は、最近のクサイエ島から約四百四十海里、最遠のヤツブ島から約千九百八十海里のところにある。布哇監視の任務を帯びた我が艦艇が、逸早くアメリカ艦隊の動靜を報ずれば、當時委任統治諸島にあつた我が艦艇は、即時急を聞いて東航し、いづれもこれに赴援するに相違ないから、陸兵を連行したアメリカ艦隊が、辛うじて二千一百海里の海面を航行し、渺茫たる水平線上、夢のごときヤルート島の椰子林を望見した時には、ラタックおよびラリックの礁島群は、いづれも我が奇襲艦艇の巢窟と化し、ほとんど一步をも足を踏み込む餘地がないことになつてゐるであらう。

いふまでもなく、ヤルート島占領の企圖を有するアメリカ艦隊は、附近に唯

神出鬼没
の日本艦

一の安全な錨地さへ有つてゐないから、かかる危険さはまらない海上で、四顧暗澹たる夜間でさへも、皆全身を暴露して假泊しなければならぬ。

見渡すかぎり、ただこれ日本の委任統治島！ 點々青螺のごとく葦布する珊瑚礁島には、どこに日本の潜水艦が匿れてゐるか、どこに日本の驅逐艦が潜んでゐるか、それは一切判らない。ところが、ただそればかりではなく、綠滴る椰子の樹蔭に、怖ろしい日本の戦艦が、十四吋の巨砲を撫して、ひそかに待機してゐるものが絶無だと、果して何人がこれを保障し得るか。

腕をこまぬいて思案ばかりしてゐたら、いつ何ん時日本本土から強大な艦隊がやつて来るかも判らない。布哇とヤルートとのあひだは約二千一百海里であるが、日本本土とヤルートとの間は約二千五百海里弱に過ぎぬ。飛電一尖、ただちに横須賀軍港を飛び出した艦隊は、アメリカ艦隊に遅れること僅かに十七八時間の後には、すでにアメリカ艦隊の視界の裡に道入つて来るであらう。

陸上を基
地とする
強力な爆
撃機

殊に、陸上を基地とする強力な日本の爆撃機は、必要さへあれば、いつ何ん

時でもヤルルートまで翔んで来る。

霞ヶ浦から父島まで約五百三十海里、父島からサイパンまで約七百五十海里、サイパンからトラックまで約六百海里、トラックからボナベまで約三百七十海里、ボナベからクサイエまで約三百四十海里、クサイエからヤルルートまで約四百四十海里。順々に飛び石傳ひにやつて来ても、あまり大したことはない。況んや、父島からトラックに翔び、トラックからヤルルートに翔べば、より一層所要時間は短縮されるであらう。かかる事態の下に置かれたアメリカ艦隊は、それでも尙ほヤルルート島を奪取しようといふのか！

唯一のヤルルート島さへ取れないとしたら、最後の手段にも手を措いたアメリカ艦隊は、さてそのつぎに何を遣らうとするであらう。日本の戦略的地位が有する Impregnability は、決してジョン・ガンサー一流の樂天論によつて動搖するものではない。

日本は難攻不落なり

日本は、それ自身において難攻不落だ。約七百年前、クビライ艦隊の來攻に

博多灣に
おけるカ
スタロ
ファイ



對して努めた東支那海の役目は、一九四〇年の今日、立派に太平洋がこれを勤

めるであらう。戦理の根本を無視して、絶対に不可能だと決つてゐることを、アメリカ艦隊が敢て強行しようとするれば、アメリカ艦隊の前途に待ち設けてゐる運命は、やがて博多灣におけるカタストロフィとなつて、躊躇なく彼等の上を見舞ふに相違ない。

果して然らば、この場合における日本は、アメリカの戦意を挫折させるために、いかなる作戦を講ずべきであるか。

巴奈馬運河と布哇

神経過敏なアメリカ人たちは、しきりにパナマ運河の安全を顧慮してゐる。

アメリカが英領諸島を租借したのも、獨伊兩國艦隊の攻撃に對して、それを守るのが主たる目的の一つであるが、またそれだけでは満足出来ないものと見え、アメリカは今労働者を收容する千五百棟の住宅を新築してまで、さかんに第三閘門の新設や、ミラフレタスおよびベドロ・ミグエル兩閘門の改良や、カリブラ・カットの擴張や、パナマおよびコロンの間の自動車道路の建設や、アルブルックおよびコロソ兩飛行場の補強などをやつてゐるといふことだが、それほどパナマは危いものであるかどうか、私はいささかそれについて考へて見たい。

パナマ運河は、横濱を距ること約七千七百海里、ヤルルート島を距ること約五千三百海里だから、日本本土およびヤルルート島を根據地とする日本の飛行機は、勿論そこまでは翔んで行けない。

潜水艦は行けるが、それが出かけて行つたのでは、到底運河を破壊すること

は出来ぬ。それかといつて、航空母艦が出かけて行くためには、ぜひともこれを護衛する艦隊が必要であるが、パナマ運河を破壊するために、日本艦隊の有力な一隊が、アメリカにとつて非常に有利の地位にあるパナマ灣まで出かけてゆくといふことは、むしろ狂氣に近い沙汰であつて、正しい常識を具へてゐるものは、斷じてさういふ莫迦々々しい冒険を遣るわけではない。して見ると、パナマ運河は、絶対に安全な地位に置かれてゐると言へるが、さう考へておいていいであらう。

さすがに、ジョン・ガンサーは、その點だけは心得てゐる。

彼はいふ。——多くの軍事専門家は、距離の関係からして、パナマの運河地帯が、太平洋方面からの攻撃を受けることは、ほとんどあるまいと信じてゐる。日本の第五列が、中央アメリカの何處かにでもゐて、それが何か細工でもやれば兎も角、日本からパナマまでの距離は、約八千海里を隔ててゐるから、日本の航空母艦がこれを空襲しようとするれば、よほど堅固な備へをした上で、初め

て攻撃にかからなければならぬ。かかる冒険を敢てすることは、ほとんど無謀に近いといつてもいいから、それは到底問題になる資格はないであらう。

私は全面的にジョン・ガンサーの説を承認し、且つこれを尊重する。日本はまさかさういふ冒険はやらないし、またやつて見たところで、アメリカの全艦隊が、すでに太平洋に集中してゐる以上、果してどれだけの實際的效果があるか。軍需品その他の資材を輸送する上には、アメリカも多少困ることもあるであらうが、そこはアメリカのことだ。いよいよといふ場合には、アメリカ國內の全鐵道を動員しても、優にそれくらゐな困難は克服するであらう。

日本は、大向うの喝采を博するため戦争をするのでもなければ、いたづらに痛快を連呼するために戦争するのでもない。必敗の數明らかな作戦を強行して、一艇一兵をも傷つけることは、絶対にこれを慎しまなければならぬ。

さらに、ある論者は、日本のアリューシャン群島占領といふことを問題にするものもある。

なるほど、横須賀とダッチ・ハーバーとの距離は、群島の北側を経由して二千五百七十海里、アクタン・バスを経由して二千六百五十海里であるから、強ひてそれを遣らうと思へば、萬更出來ないに限つたことではあるまい。しかし、強ひてそれを遣り、さうして巧くそれに成功し、都合よく白熊の棲む土地と氷塊とを手に入れて見ても、日本はそれによつて一向幸福にもならなければ、一向愉快にもならないであらう。くどいやうではあるが、アメリカと戦争する場合の日本は、戦争目的そのものに向つて、あくまで直往邁進すればいい。

従つて、よほど恵まれた状態でない限り、夢にも布哇群島を占領しようなどと考へてはならぬ。日本が難攻不落であることく、布哇群島も難攻不落である。アメリカ艦隊の過半が、沈没するかまたは損傷を受け、地上の飛行機部隊も、ほとんどその影を見なくなつたといふやうな場合であれば兎も角、こちらの方が多少優勢らしいといつたやうな場合に、輕々しくさういふ非望を企てたりすると、それこそどんな災厄が吾人を待ち設けてゐるかも知れぬ。

軍事専門家のあるものは、オアフ島の東北岸に絶好の上陸地點があるなどといふ。それは勿論あるであらう。丹念に探し廻れば、まだその外にも一ヶ所や二ヶ所はあるかも知れぬ。しかし、布哇攻略戦の不可能な所以は、上陸地點があるとかないとかいつたやうな點にあるのではない。敵がこちらのそれに匹敵し得るほどの大艦隊を有ち、有力な空軍を有ち、堅固な要塞を有ち、さらに相當な兵力を有つてゐる場合、本國を距ること三千四百海里の彼方に、陸軍を多數の運送船に積んで行くといふこと自體が、すでに無謀以上の無謀だといふ點にあるのだ。大した海軍もなければ、有力な空軍もなく、しかも攻撃軍に多大な便宜を興へ得る地點にあるシンガポールなどは、頭からわけが違ふのである。

試みに考へて見給へ。ムツソリーニは、なにゆゑ眼と鼻とのところにあるマルタ島を攻略しないのか。

シシリ島のバツセロ岬角から、マルタ島のバレッツタ軍港までは、せいぜい

ムツソリーニは
何れも攻め
ないか

百四五十キロもあるかないかだ。驅逐艦が全速力で突つ走ると、ものの三時間もすると、もうその軍港の前に到着するといつたやうな近距離にあるのに、彼は容易にそれに手を出さうとしない。さすがに彼は戦争の實際といふものを心得てゐる。輕率に下手な真似でもやると、どういふ酷い眼に逢ふか判らないから、四六時中眼障りだとは思ひながらも、ちつと齒を喰ひしばつて、肚の底から湧いて来る自己の欲望を押へてゐるのだ。

布哇さへ攻略すれば、いかに富強世界に冠たるアメリカでも、事太平洋に關するかぎり、もう手も足も出なくなつて来る。日本がどうしようかと、支那がどうならうと、彼はただ黙つてこれを見てゐるよりほかに道はない。ことごとに餘計な差出口をして、不必要に日本を怒らせて見なくなるやうな妄念が起るのも、いはば布哇といふ餘計なものがあるからだ。さう考へると、出来ることなら布哇をアメリカの手から奪ひ取つて、永久に禍根を斷つのも一策だが、布哇の有する戦略的地位は、遺憾ながらさういふ簡單なわけにゆかないやうに出來

てゐる。

英領諸島の奪取

しかし、第一次作戦を終り、第二次作戦も終つて、こちらの手があいて仕方がないやうなら、危険な布哇攻略戦など企てるよりも、むしろ英領およびオーストラリアの委任統治領でも奪取した方が、いかほど勞すくなくして、しかも益が多いか判らない。

太平洋の地圖を開いて、赤道線の南を見ると、そこには英領ニューギニアがある。オーストラリアの委任統治領たるニューギニアおよびニューブリタイン群島もある。さらにその東方には英領ソロモン群島もあるし、稍東北に離れて燐礦を産するナウルおよびオーシャンの二島もある。紅玉累々、日本の來つて啄むのを待つてゐるものは、まだその外にもすくなしとしない。

英領ニ
ューギ
ニア

これらの諸島嶼の大部分を奪取するためには、老朽の巡洋艦一隻か、それとも驅逐艦の二隻も奮發すれば、それですべての用は足るであらう。

海上から威嚇砲撃の六七發も喰はした上、百四五十人の陸戦隊員が、機關銃の二三挺も携へて、それに旗竿一本だけ忘れずに持つてゆけば、わけの判らない土人どもは、カノーを陳ねてこれを迎へ、わけの判つた白人たちは、競々として命これ従ふの態度を示すに相違ない。南海の波濤碧玉よりも青きところ、鬱々たる熱帯樹の緑につつまれた蠻界に、翻翻としてひるがへる日章旗を思ふと、私はそぞろに神往き魂飛ぶの感なきをえない！

筆の序でに、私はグアム島についても一言して置きたい。

グアム島
の攻略

例のスターリング少將は、戦争勃發の場合、アメリカはこれを放棄するといつてゐるが、アメリカが今でもそこに相當巨額の資を投じて種々の施設を遣つてゐるところを見ると、果してどういふものか。極力フィリッピンを死守する覺悟がないかぎり、この上グアムの防備を強化したところで、それはほとんど

無意味に近いではないかといふ議論は、それ自身として、なるほど理義一貫したものであるが、國家間の軍事における對抗心理は、きはめて複雑微妙なものだから、強情なアメリカが、本當にそこまで悟り切つた態度をとるかどうかが、私はかなり怪しいものだと思つてゐる。

しかし、アメリカがグアムを放棄するかしないかは兎も角として、日本がせひともそれを必要だとすれば、日本はいつでもそれを奪取するに苦しむことはあるまい。

グアムは、日本の委任統治諸島によつて包圍された蕞爾たる小島で、長さ三十二哩、幅員四哩乃至十哩、周回約百哩、總面積約二百三十平方哩に過ぎないといふのだから、日本艦隊の砲煩と爆弾とが、オローテ半島の岬角にある舊式堡壘を沈黙させ、首都アガナに駐屯する約二千の陸戦隊を撃破して、完全にこれを自己の手に收めるには、ものの六七時間もあれば結構であらう。例のヘクター・バイウォーターは、日本艦隊が黎明グアムに達すれば、日没には既に日

グアム島の地位

章旗の島上に譟へるのを見るであらうといつてゐるが、強力な飛行機の存在する今日からいふと、おそらくそれほどの手數をも要すまい。

いづれにしても、第二次作戦を完了してから後の日本は、慌てず、騒がず、可能な作戦を、ただ可能な範囲内においてのみ行ひ、絶対に無理なことをやつてはならぬ。

従つて、嚴重に布哇を監視し、必要に應じてフィリッピンまたはグアムを攻略する以前、アメリカの領土などには、ただの一指をも觸れる必要はない。アメリカ艦隊が、もし意を決して日本進攻の愚策をでもやるといふ氣配があれば、日本は壘を高うし、堀を深うしてこれを待ち、いはゆる攻勢防禦の眞髓を發揮して、有史以來の大艦隊を邀撃し、吾人の欲する時と場所とにおいて、これを完膚なきまでに撃破し、殲滅し、壓殺し、而してこれを名實ともに第二のクビライ艦隊たらしめることが出来さへしたら、それで吾人に與へられた歴史的使命は終るのである。

歴史的使命は終る

第十四 長期疲弊戦

攻めた方が負け

約言すると、太平洋の戦略的状況は、明かに攻めた方が負けることになつてゐる。

ある特別なコンディションの下で、非常に懸絶した両勢力が戦つたら、必ずしもさうばかりではあるまいが、大體において相匹敵した勢力が、普通一般の状況の下で戦つたら、當然さうならなければならないやうな事になつてゐる。

これは太平洋の地理的條件が然らしめたもので、到底人爲をもつて如何ともすることも出来ないものだから、たとへ軍艦の数が一割や二割どうあらうと、

それで根本的な影響を受くべき性質のものではない。

試みに、その理由の二三を説明して見ると、第一は、戦場となるべき太平洋が、あまりにも廣過ぎるといふことだ。

なるほど今日の武器は發達した。飛行機も遠方まで翔んで行けるし、軍艦もかなり自由な行動をすることが出来る。しかし、今日の飛行機や軍艦などの程度では、まだ太平洋を縦横無盡に馳驅して、思ふ存分なことがやれるといふところまでは進んでゐない。飛行機にも制限された行動半径といふものがあるし、潜水艦にも同様な制限といふものがある。殊に、敵地を攻略するために、遠く陸軍を輸送する場合には、いろいろ込み入つた條件があるが、現在の太平洋の廣さをもつてしては、到底その條件を充たすだけの準備を整へることが出来ない。

第二は、太平洋の強國たる日米兩國は、いづれもその敵國に接近して適當な前進根據地を有つてゐないといふことだ。

かかる前進根據地さへ有つてゐれば、たとへ太平洋が廣きに過ぎようと、そこは何とか工夫することによつて、相互にその敵國の死命を制する手段を見つけることも出来よう。然るに、日本は全然何物も有つて居らず、アメリカの有つてゐる布哇は、日本を距ること餘りにも遠きに過ぎるから、折角有つことは有つてゐても、いまだその用を充すに足りない。せめてフィリッピンを死守し得る可能性でもあればだが、それもすでに説明した通りの状態で、ほとんど何等の希望をかけることも出来ぬ。

第三は、それぞれ違つた事情と環境との下にありながら、日米兩國の現状は、その何れをも封鎖によつて屈服させることが出来なくなつてゐるといふことだ。

アメリカは、無盡藏な資源を擁してゐる上に、しかも二つの大海洋に面してゐるから、これを封鎖するのも至難であるし、假に封鎖しえても、一向困惑しない資格を有つてゐる。これに反し、日本は、必ずしもその資源において恵ま

アメリカは無盡藏な資源を擁す

れてはゐないが、近くアジア大陸および南洋方面に接してゐるから、これによつて優に自國を養ひ得るのみならず、その戦略的地位の関係上、日本の手中からこれらの培養資源を奪取することは、ほとんど不可能だといつてもいい状態になつてゐる。

第四は、たとへ萬難を排して敵國の海岸近くその艦隊を送つて見ても、坐して敵の來攻を待つものは、ことごとくに有利な地歩を確保することが出来るが、進んで懸軍萬里の遠征をこころみるものは、一から十まで不利なコンデイションの下に置かれるから、數字的には多少優勢であつても、到底最後の勝利を占めることは出来ないといふことだ。

なにがゆゑに英國に遠征したスペインの無敵艦隊が敗れ、なにがゆゑに極東に遠征したロシア第二、第三の太平洋艦隊が敗れたかを思へば、たやすく遠距離作戦の成功しえない所以は、これを理解するに難くあるまい。日米兩國は、恰度それとおなじやうな地位に立つてゐる。

懸軍萬里の遠征軍

以上の外にも、尙ほ多少の理由はあるが、その最も根本的なものは、大體前述の四つに盡きてゐる。

従つて、太平洋の戦略的状態は、明かに攻めた方が負けることになつてゐるから、日本は敢てアメリカの本土を攻めようとも思はないし、また攻める必要もない。何かの機會に、多少それに似たことをやつたにしても、それはみづから守るために必要であるからやつたのか、または他に何かの目的があるからやつたのかで、本格的にアメリカを攻めるといふのとは、全然その性質を異にしてゐるであらう。

日本は敢てアメリカを攻めない代りに、アメリカもまた容易に日本を攻めて來ることはあるまい。強ひて攻めて來れば、みづから好んで死地に身を投ずるのも同様、まつたく取返しのない結果を招致するであらう。この點において、日本の戦略的立場は確固不拔で、徹頭徹尾不敗の地位を占めてゐる。三國同盟が成立した當時、イタリーの軍事記者アベリウスもそれをいつたし、ドイ

アメリカ
本土を攻
める必要
なし

日本潜水
艦による
貿易破壊
戦

ツのアルゲマイネ・ツアイツング紙のクラウスもそれをいつたが、それは決して盟邦記者諸君のお世辭ではない。

さすれば、第二次作戦を完了した後の日本が、アメリカに對してなすべき積極的作戦は、一にも貿易破壊戦、二にも貿易破壊戦で、倦まず、撓まず、貿易破壊戦さへ續行して居れば、それによつて漸次戦争の終局は近づいて來るであらう。

日本潜水艦による貿易破壊戦が、もし吾人の想像するがごとき活況を呈したら、太平洋におけるアメリカは、一部の沿岸航路を除く外、すべての航路といふ航路を、いづれも遮断または遮断に近い状態におとし入れられるから、アメリカとオーストラリア、アメリカとニュージールランドとの交通は勿論、アメリカと中央アメリカ以南における太平洋諸國との交通も危殆に瀕し、兩洋聯絡の役目を勤めるパナマ運河は、依然健在でありながら、一向何の用事もないといつたやうな奇觀を呈する場合があるかも知れぬ。

太平洋國
たる實を
喪ふ虞れ
あり

さすれば、當時のアメリカは、その太平洋に關するかぎり、アジアとは完全に隔離され、南洋諸島ともほぼ同様な程度に隔離され、オーストラリアおよびニュージージーランドとは半ば隔離され、しかも中央アメリカおよび南アメリカとも頻々隔離されさうな事態の下に置かれるから、全然太平洋國たるの實を喪ひ、おそろく半身不隨の不自由を忍ばなければならぬ状態になるであらう。

かかる不自由な状態に陥ることを避けるため、アメリカの輕巡洋艦および驅逐艦は、極力航路の安全を保障するに努めるではあらうが、アメリカ本土と布哇との聯絡は、それ以上に大切な任務であつて、これを寸時も放置しておくことが出来ないから、その限られた勢力の範圍内において、アメリカは果してよくそれをなし得るであらうか。

貿易破壊戦と獨伊の協力

かかる場合、私が心から期待してゐることは、貿易破壊戦に對する獨伊兩國海軍の協力である。

現に獨伊兩國海軍は、海上において北大西洋の通商路を遮斷し、それによつて英國を饑餓の慘におとし入れるため、花々しい貿易破壊戦を展開してゐる。

しかも、その戦果は、空軍による英本土爆撃にも勝り、バーミンガム、エントリー以下、ミッドランドの十六工業都市を壊滅されるよりも、むしろ一隻の小麥輸送船を撃沈される方が、英國にとつては遙かに致命的だといはれるところまで擧つてゐるらしい。樞軸國對アメリカの戦争が起つた時、それと同様な事態が、やはりアメリカに對しても起つたら、太平洋における貿易破壊戦の効果は、おそろく倍加されるであらう。

率直にいふと、アメリカと戦ふ場合、大西洋における獨伊兩國海軍は、全力を傾倒してアメリカの南大西洋航路を遮斷し、アメリカとアフリカとの交通、アメリカと南アメリカとの交通を停止しなければならぬ。

大西洋に
おける獨
伊兩國海
軍

さすれば、當時のアメリカは、その太平洋に關するかぎり、アジアとは完全に隔離され、南洋諸島ともほぼ同様な程度に隔離され、オーストラリアおよびニュージールランドとは半ば隔離され、しかも中央アメリカおよび南アメリカとも頻々隔離されさうな事態の下に置かれるから、全然太平洋國たるの實を喪ひ、おそろく半身不隨の不自由を忍ばなければならぬ状態になるであらう。

かかる不自由な状態に陥ることを避けるため、アメリカの輕巡洋艦および驅逐艦は、極力航路の安全を保障するに努めるではあらうが、アメリカ本土と布哇との聯絡は、それ以上に大切な任務であつて、これを寸時も放置しておくことが出来ないから、その限られた勢力の範圍内において、アメリカは果してよくそれをなし得るであらうか。

貿易破壊戦と獨伊の協力

かかる場合、私が心から期待してゐることは、貿易破壊戦に對する獨伊兩國海軍の協力である。

現に獨伊兩國海軍は、海上において北大西洋の通商路を遮斷し、それによつて英國を饑餓の慘におとし入れるため、花々しい貿易破壊戦を展開してゐる。しかも、その戦果は、空軍による英本土爆撃にも勝り、バーミンガム、エントリー以下、ミッドランドの十六工業都市を壊滅されるよりも、むしろ一隻の小麥輸送船を撃沈される方が、英國にとつては遙かに致命的だといはれるところまで擧つてゐるらしい。樞軸國對アメリカの戦争が起つた時、それと同様な事態が、やはりアメリカに對しても起つたら、太平洋における貿易破壊戦の効果は、おそろく倍加されるであらう。

率直にいふと、アメリカと戦ふ場合、大西洋における獨伊兩國海軍は、全力を傾倒してアメリカの南大西洋航路を遮斷し、アメリカとアフリカとの交通、アメリカと南アメリカとの交通を停止しなければならぬ。

獨伊兩國海軍の努力によつて、都合よくさういふ事態を現出したら、すでに太平洋國たる實を喪つてゐるアメリカは、さらに大西洋國たる實をも喪ふことになり、まづたく世界の各大陸から隔離し、その商品を海外に輸出することも出来なければ、その必要品を海外から輸入することも出来ず、言葉通り孤群索居の境涯に落ちて、心からその寂寞を歎かなければならぬことになるに相違ない。

しかし、かかる境涯に陥つても、アメリカは依然として戦争を繼續することに支障を生じるやうなことはあるまい。

緊密にカナダとアメリカとが結合してゐれば、一億三千万の國民を養ふべき食料は、むしろ餘剰を生ずるかも知れないし、戦争遂行に必要な物資は大部分これを自給自足し得るから、現に英國が逢會してゐるやうな危機は、まづアメリカの身の上を訪れることはあるまい。しかし、いかに天恵豊富なアメリカといへども、全然その身に弱點がないといふわけではない。

天恵豊富な
アメリカの
弱點

アメリカの老大な産業組織は、世界はアメリカのマーケットなりといふ前提の下においてのみ、これを維持することの出来るものだ。

然るに、樞軸國側の貿易破壊戦によつて、アメリカが世界の各大陸から隔離し、言葉通り孤群索居の境涯に落ちたとしたら、世界におけるアメリカのマーケットは、ほとんどその大部分を喪失することになる。さういふ場合、アメリカの産業組織は、果して如何なる影響を受けるであらうか。更めて多くの論議を繰返すまでもない。アメリカがすべての貿易路を喪失した結果は、明かに老大な産業組織の崩壊となり、延いてその商工業を窒息させることになるに相違ない。

偉大な産業國たるアメリカにおいて、その産業組織が崩壊するといふことは、むしろアメリカそのものの崩壊を意味するものではないか！

アメリカ國民は、久しいあひだの歴史と傳統とに鍛冶されて來た独自の性格を有する國民ではない。いはば金儲けのために故國の山河を辭して、遠く新大

アメリカ
の國民性

産業組織
の崩壊

陸にやつて来た出稼人の寄せ世帯である。經濟上の繁榮に恵まれて、樂にその日の生活を送ることが出来てゐるあひだは、そこに一種の風格ある國民性をも形作つてゐるやうであるが、その産業組織が崩壊して、到るところの工場が閉鎖し、それによつて失業者道途に満ちるといつたやうな狀況を發生した時、彼等はそれでも尙ほ戦争繼續に對する情熱を失はないでゐられるであらうか。

南北戦争當時の記録を調べて見ると、北軍だけで總數十九萬四百人の逃亡兵が出てゐる。米西戦争およびフィリッピン鎮壓戦の場合においても、やはりその成績は香ばしくなかつた。前の歐洲大戦當時の狀況は、今のところ不明であるが、とにかくアメリカ軍の士氣が云々されるのは、その兵が弱いからだといふよりも、むしろアメリカ國民の國家に對する觀念が、吾人のそれよりも根本的に違つてゐるからだ。現に、アメリカ政府の徴兵令施行に對して、州によつては猛烈な反對をしてゐるところもあるが、南北戦争時代のアメリカにおいては、筆や口で反對するどころか、絶対に中央政府の命を奉ずることを拒絶した州も

徴兵令施行に對する
猛烈な
反對

すくなくなかつた。

アメリカ國民の本當の心持をいふと、俺たちは何も國家の理想やアスピレーションに殉ずるために、わざわざアメリカあたりまでやつて来たのではない。金儲けのためにやつて来たのだ。それにしないでもいい戦争をして、一つお國のために死んで呉れといはれて見たところで、なんで欣んで死ねるものかといふにあるのだらう。従つて、樞軸國對アメリカの戦争が、延いて産業組織の全面的崩壊でももたらさうな形勢になつたら、民權第一主義のアメリカは、よほど苦しい立場に置かれ、心ならずも平和を欲するやうな氣分になつて来るかも知れぬ。

しかし、何といつても富強世界に冠たるアメリカのことだ。

粘り得るだけは粘つて、あくまで樞軸國側の疲弊困憊するのを待つであらう。樞軸國側にしても、極力貿易破壊戦に努力する以外には、さし當りこれといつてアメリカの急所を衝く適當な戦法もないから、相手方が次第に衰弱するのを

相手方の
衰弱を待
つ

待つて、何か新奇な手段を見出さうとするであらう。

かかる時期において、吾人が絶えず注意して、今からこれに對する應策を立てて置かなければならないことは、一方太平洋において戦争が繼續しつつあるあひだに、他方アメリカにおいては續々新しい軍艦が生れ、それをそのままの状態に放置しておいたら、わづか數ヶ年の後には、現在における日米兩國海軍力の對勢が破れ、アメリカは一躍手もつけられないほど強大な海軍國として現れて來るであらうといふことだ。

米國海軍力の膨脹

アメリカが、すでに立案し、現に實行しつつある造艦計畫は、夙に兩洋艦隊、建設計畫の名をもつて呼ばれ、その尤大さに至つては、まづたく前古未曾有のものである。

アメリカの造艦計畫

この造艦計畫は、大體一九三四年のヴァインソン・トランメル案に引き續いて立案されたもので、一九三八年五月十七日に成立した第二次ヴァインソン案、一九四〇年六月十七日に成立した第三次ヴァインソン案、および同年九月九日に成立したスターク案の三案を包含するものである。この三案の中に含まれてゐる各種艦艇の總數は、おそらく三百隻にも近いものであらう。現に、アメリカの海軍省の發表によると、目下建造中に屬する艦艇の總數は、約二百隻の多數に上るといふことであるが、それには多少の宣傳があるにしても、兎も角それが相當な數に上つてゐることは、あれほど澤山あるアメリカの造船所の中で、新しい建艦入札に對して、近頃では欣んでこれに参加するものがすくないといふ事實に照して見ても、ほぼこれを想像することが出来るであらう。

昨年十月二十二日の夜、ヘラルド・トリビューン紙の公開講演會に出席したノックス海軍長官は、將來のアメリカが保有すべき海軍力について、非常に露骨な口吻をもつて語つてゐる。それは驚くべき尤大なもので、さすがにアメリ

カだといはざるをえない。

彼はいふ。——吾人が將來において有つべきアメリカの海軍力は、現在の主力艦十五隻が二十二隻となり、現在の航空母艦六隻が十八隻となり、現在の巡洋艦三十二隻が八十五隻となり、現在の驅逐艦百五十九隻が三百二十五隻となり、現在の潜水艦百四隻が百八十五隻となるのである。

假に、これらの數字が、第二次ヴァインソン案、第三次ヴァインソン案、およびスターク案なるものの内容を示唆するものとすれば、兩洋艦隊建設計畫に基くアメリカの新建造計畫は、總數三百十九隻の多數に上り、それが現有艦艇に結びついた場合には、かつてギリシア進攻の途に上つた千二百隻のクセルクセス艦隊も三舍を避けるがごとき底のもので、おそらくは有史以來の大艦隊として現出するであらう。

骨の髄の髓まで唯物論者に出來てゐない私は、必ずしもその尨大な數字に驚くものではないが、微笑に對するには微笑をもつてし、軍艦に對するには軍艦

有史以來
のアメリカ
の大艦隊
出現

漫然黙過
ずるを得

をもつてする原理からいふと、太平洋四千海里の彼岸において、現在唯今さういふ大計畫が着々として實現の歩を進めつつあるのを知りながら、吾人はそれをちつと黙つて見てさへ居ればいいといふわけにはゆかない。

支那事變の勃發以來、月を累ねることすでに四十ヶ月、そのあひだに直接間接國民が拂つた努力と犠牲とは、ほとんど計り知りがたいものがある。しかも、その事變いまだ終局に至らずして、さらにアメリカとの戦争を餘儀なくされるといふことになれば、たとへそれが比較的順調な道を辿る場合においても、吾人はさらに一層大きな努力と犠牲とを要求されるであらうが、吾人は斷じてそれぐらゐなことに屁古垂れてはならぬ。

アメリカの造艦計畫は、なるほど及びがたいものであるかも知れない。

しかし、吾人は過度の天佑と神助とによつて、世界に比儔なき戦略的地位を與へられ、言葉通り難攻不落の立場に置かれてゐる。アメリカの一戦艦に對しては一戦艦をもつてし、アメリカの一航空母艦に對しては一航空母艦をもつて

する必要があれば、吾人は到底アメリカとの造艦競争に及びえないかも知れないが、たくみに日本の戦略的地位を利用し、これを難攻不落の立場に應用すれば、アメリカの二戦艦に對するに一戦艦をもつてし、アメリカの二航空母艦に對するに一航空母艦をもつてすることは、必ずしも困難だとは思へない。従つて、吾人の國民的經濟および國家の財政が許し得る範圍内において、吾人は今後ともあくまで造艦を繼續し、アメリカ海軍の現有勢力に對して、日本海軍のそれが、いささかでもより、有利な地歩を保持するやうに心掛けてゐなければならぬ。

我が國の戦略的地位は、それ自身において難攻不落であり、それによつて我が國は不敗の立場を維持してゐるが、かかる戦略的地位を生かすためには、その假想敵國に對し、つねにある程度の海軍力を保有してゐる必要がある。従つて、それがいかに樂觀すべき状態にあるにしても、今後における日米兩國海軍の對勢が、月日の経過とともに懸絶し、ほとんど比較を難しとする程度にまで

アメリカの二戦艦に對しては、一戦艦をもつて

變化して來たら、もはや我が國の安全は保障されず、吾人は止むなくアメリカの軍門に降らざるをえないやうなことになるであらう。

我が國の古諺に、一文惜みの百失ひといふ言葉がある。眼前にある錙銖の利に眼が昏れて、將來の大損失を顧みない愚かさを嗤つたものであるが、古今東西の海上權力史を見ると、吾人がさういふ實例を發見することは、決してすくない數ではない。一二の例を挙げると、第二ボエニ戦争以後のカルタゴがそれであり、第二ツエストミンスター條約締結以後のオランダもそれである。吾人がアメリカとの對抗を餘儀なくされてゐるかぎりには、そこにたとへ如何なる事情があらうと、吾人は絶対にカルタゴやオランダなどの先蹤を踏まないやうに心掛け、完全に自國に與へられた使命の何物であるかを理解しなければならぬ。

幸ひにもアメリカの造艦能力および造艦速度は、吾人が漠然それを想像してゐるよりも、むしろ豫想外に低率な點があるから、机上において立案せられた計畫が、そのまま豫定通りの時期に實現するものだとも思へない。

カルタゴとオランダ

ルーズヴェルト大統領をはじめ、ノックス海軍長官や、コムプトン海軍次官などは、しきりにその點を氣に病んでゐるものと見え、私がすでに指摘して置いた通り、彼等は最近しばしば聲明を發し、アメリカの造艦能力および造艦速度が、近來著しく改善せられたことを吹聴し、わざわざ數字を擧げてまで説明してゐる。彼等がさういふ態とらしい聲明をすればするほど、私は一層それらに對して強い疑惑を有ち、アメリカ海軍の根本的缺陷が、果して如何なる點にあるかを考へて、吾人の將來執るべき造艦政策に對し、かなり意味深い暗示を受けざるをえない。

私の觀察によると、樞軸國對アメリカの戦争は、動もすると法外な長期戦争となり、相互に慢性的疲弊の状態を繼續しながら、あるひは五ケ年十ケ年の長きに亙るやうなことになるはしないかと思ふ。ヨーロッパの中世より近代にかけては、有名な百年戦争をはじめ、三十年戦争または七年戦争といったやうなものがあり、吾人は古人の氣長さを笑つてゐたものであるが、最近に至つて戦

争は再び長期化する傾向があるのみならず、それが樞軸國對アメリカの戦争といつたやうなものになると、より一層さういふ形態をとるやうな虞れがありはしないか。

第一、戦争の相手方が、相互に相手方の急所を衝く手段を有たないといふことと自體が、すでに戦争を長期化する絶好の理由となり易い。第二に、相互に戦争を繼續する能力を有つてゐるといふことも、またさういふ傾向を強めてゆく有力な一つの理由となる。資源豊富なアメリカは、優に自給自足してゆきし、外郭防禦線の内部に籠城した日本も、容易にその點では困らない。殊に、第三の理由としては、將來に老大な大建艦計畫を有つてゐるアメリカは、なるべくそれが實現してから決戦したいといふ氣分になり易いから、どうにか自國の内部分さへ抑へてゆくことが出来れば、わざわざ戦争を長期化することによつて、自國に有利な状態をもたらしさうといふ氣分になり易いといふ點もある。

いづれにしても、樞軸國對アメリカの戦争は、悪くこじれてゆくと、どれは

ど長く續く戦争になるかも知れぬ。その代り、相互に戦争状態にあるといふ意識を有つてゐるだけで、一向戦闘らしい戦闘は起らず、ちつと睨み合つてゐるあひだが多いといったやうなことも、勿論起り得る可能性があると思ふ。

第十五 日本必勝の信念

歴史進展の急潮

過去の一ケ年間を通じて、吾人はいやといふほど多数の國家が没落する有様を見て來た。たつた今の今まで繁榮と幸福とを謳つてゐた國家も、ひとたび歴史進展の急潮に見舞はれると、いかにはかなく消え去つて終ふものであるかを見て來た。

ナチス・ドイツの勃興とともに、吾人は一夜のうちにハウスブルグ帝國の遺兒が、その姿を地圖の上から消してゐるのを見た。中歐協商國の顔役として、その得意な時代には、多少羽振りのいいところを見せてゐたチェッコ・スロヴ

キアも、今では泡沫のごとく消え去つて、歴史進展の過程における一つの斑點スポットとして残ることさへ出来なかつた。ヴキヌチユラ河畔の豊沃な田園を襲うた急潮は、その志士たちが、約一世紀を費して建設した國家を、わづか三週間にして跡形もなく洗ひ去つて終つた。

ノールウエーのフイヨルドも、デンマークの牧場も、やはりその災厄を避けることは出来なかつた。時代と隔絶した意識の裡に生き、昔ながらの騎士物語を追慕してゐるあひだに、かのお伽話めいた女王國は、はかない曉の夢のやうに消えて行つた。若いベルギーの君主が、いちやく抗すべからざる歴史の急潮を見て、その進展の前に、あつさりと道を譲つたことは、むしろ賢明な處置であつた。

フランス
の頓死

フランスは頓死した！

何が何やら判らないあひだに、フランスはもう死骸となつて横はつてゐた。精銳なタンクと爆撃機との前には、一人のジャンヌダークもゐなかつた。一人

のルイ十四世もゐなかつた。一人のナポレオンもゐなかつた。一人のフォツシユもゐなかつた。すべての傳説と過去とがその影を潜めて、見渡すかぎり荒涼たる廢墟と化したミューズの平原には、崩れかかつたマチノの堡壘と、食を求めてうろついてゐる野良犬の姿とだけが、かすかに在りし日の俤を物語つてゐるに過ぎない。精神的にいふと、華かな英雄譚に飾られた古い偉大なフランスは、もはやふたたび蘇生して來ることはないであらう。

急激な歴史進展の潮は、今や怒濤のごとくドーヴァー海峡の對岸を襲うてゐる。

古代のローマ帝國を倒したものは、今のゲルマン民族の祖先たるゴール民族であつた。そして、古代のゴール民族の子孫たる今のゲルマン民族は、現代のローマ帝國を倒さうとしてゐるのだ。歴史は繰返すといふか。前後一千五百年間にわたる時代の長い間隔を置いて、歴史進展の急潮が、まつたくおなじ民族の上に、まつたくおなじ使命を課し、まつたくおなじ役割を振り當てたといふ

歴史は繰返す

ことほど、私にとつて興味に値するものはない！

英人の宿命的な過失は、英帝國にのみ特別な攝理が行はれると思つてゐたことにある。ローマ帝國は滅んだ。しかし、英帝國は滅びない。英帝國にはフェニックスの奇蹟があり、その奇蹟とともに、英帝國は不滅であると信じてゐたことにある。すべては運命だ。かつてカルタゴを滅したものが、今英帝國を滅さうとし、かつてローマ帝國を滅したものが、今英帝國を滅さうとしてゐるのだ。ピットもそれを知らずに死に、チスレリーもそれを知らずに死に、さらに大チエムバーレンでさへそれを知らずに死んだが、今彼等を地下に呼び起し、現在の英帝國が、如何なる危機に臨んでゐるかを見せたら、彼等は果して何といふであらう。

英帝國の危機

歴史進展の急潮は、今やアジアにおいても渦巻いてゐる。

アジアにおける日本は、ヨーロッパにおけるドイツとおなじやうに、まったく同一の使命を課せられ、まったく同一の役割を振り當てられて、過去四十ヶ

歴史の進展を阻むもの

月のあひだ、すでに惡戰苦闘をつづけて來た。大東亞新秩序建設の大業は、日本がよくその使命を果し、よくその役割を演じ得ることによつてのみ、はじめてこれを完成することが出来るのだ。

かかる瞬間において、敢て歴史の進展を阻まんとするアメリカは、突如として起ち上り、ヨーロッパにおいてはドイツに對し、アジアにおいては日本に對し、いづれもその前途に立ち塞がつて、無法にもその進路を抑止しようとしてゐるのだ！

樞軸國對アメリカの戰爭は、それがひとたび現實化せらるるや、ただちに世界各國をその渦中に巻き込み、すべての人類をして、ほとんど救ふべからざる煉獄の裡に投げ込むのみならず、それはやがて新時代の百年戰爭ともなつて、地球の表面全體が、一様に疲弊と困憊との色に塗り潰されるまで、いやといふほど長期に亘つて繼續するかも知れない。しかも、その立役者たる日本は、主として戰爭の重大な部面を負擔し、そのもつとも困難な任務を果すべき立場に

置かれてゐるから、それによつて吾人の國土および國民が受ける惨害は、特に甚しいものがあるであらう。

時にはどこかの都市が爆撃されることがあるかも知れぬ。時には運送船の幾隻かが引きつづいて撃沈されることがあるかも知れぬ。物資はいよいよますます不足して、吾人の主要食糧品さへ、これを求めかねることがないとも言へない。戦争に勝敗があるかぎり、日本の艦艇には、絶対に敗戦の悲運が見舞ふことがないと、果して何人が言へるか。吾人はすべての災厄を覺悟し、すべての犠牲を覺悟し、すべての苦難を覺悟することによつてのみ、この歴史の偉大な舞臺において、偉大な國民たるの實を示すことが出来るのだ。

なにゆゑ古代のローマ人は偉大であつたのか。

紀元前二五五年から、紀元前二四九年に至る七ケ年のあひだに、彼等はほとんど勝利らしい勝利を経験せず、その陸軍は、チュニス附近の戦闘によつて殲殺され、その海軍は、ドレバナの海戦において殲滅され、しかも三回に互つて

すべての
災厄、苦難
を覺悟せよ！

古代ローマ
人の偉大さ

復興した艦隊は、はじめシリー島の沖合で難破し、次にバリヌリ岬の附近で難破し、最後にエクノモス附近の海面で難破し、言葉通りその全勢力を喪つたにも拘らず、カルタゴとの和を唱へた元老議員は、ローマの街に出るや否や、激昂した民衆によつて、即時撲殺されて終つた。一難を経、一敗を喫するごとに、ますます最後の勝利に對する確信を深めてゆくところに、古代のローマ人の偉大さがあつた。

日本人の執るべき態度

従つて、アメリカと戦ふ場合の吾人は、あくまで不撓不屈でなくてはならぬ。あくまで泰然自若としてゐなくてはならぬ。少々面白くないことが起つたからといつて、それですぐ顔色を變へるやうなことではいけない。吾人は最後の勝利を目指して戦つてゐるのだ、その最後の勝利は、こちらにあるのだといふ強い

戦ひ抜く
といふ
意気込み

信念を有ち、三年や五年は愚か、若し必要とあらば、十年は十五年でも、戦つて、戦つて、戦ひ抜くぞといふ意気込みをもつて、最後の瞬間まで戦はなければならぬ。

これだけの試練に堪へるためには、非常に粘り強い國民性が、必要である。このたびのヨーロッパ戦争を見ても、その點に缺くところのあるフランス人は、すぐ腰が砕けて終つたが、比較的その點を多く恵まれてゐる英國人は、今尙ほ健氣に戦つてゐる。すぐ腰が砕けて終つては、もう絶対に回復する見込はないが、ともかく戦ひをつづけてさへれば、またどういふ奇蹟が起つて来るかも知れない。兩者ともに、結局おなじ運命に逢會するにしても、フランス人は精神的に死んで終つたも同様であるが、英人はまだ精神的に生き返つて来る見込みがある。

果して然らば、我々日本人はどうであるか。ラテン民族的であるか。それともアングロサクソン民族的であるか。

火山質の
性格

用意された答への多くは、日本人をもつて火山質の性格を有ち、はやく爆發する代りに、すぐ沈黙する民族だといふ風に解してゐる。熱することも早い、冷めることも早いといふ特徴は、かかる火山質の性格を有つた民族に共通するもので、この點からいふと、日本人は、アングロサクソン民族的ではなく、明かにラテン民族的だと言はなければならぬ。

しかし、民族の性格といつたやうなものは、その時々事情と環境とによつて、いろいろに變化するものだから、一口にこの民族はかうだ、あの民族はああだといふやうに、これを簡単に決めて終ふことは出来ない。ローマ人とカルタゴ人の對立は、ほぼ一世紀のあひだつづいたが、この兩民族が、かかる長期に互つて粘り強く戦つたといふのは、兩者ともに粘り強い性格の持主であつたからだといふよりも、むしろその時の事情と環境とが、この兩民族をして、止むなくさうさせたのだと解釋する方が、はるかに實際に適合した考へ方であるまいか。

私は今ここで日本民族の性格論をくどくどしようとは思はない。たとへそれがどうあらうと、アメリカと戦ふ場合の日本人は、絶対に粘り強い民族でなければならぬからだ！

若し萬一過去においてさうでなかつた場合があつたとしたら、今度はそれを根本から改め、世界五千年の歴史のあひだにおいて、未だかつてかかる粘り強い民族はなかつたといふほど、吾人は粘り強い民族にならなければならぬ。

幸ひにも、吾人の盟友たるドイツ人は、その歴史によつて理解されるところによると、その時の事情と環境との如何に拘らず、世にも稀れな粘り強い性格を有つてゐる。現に、前の歐洲大戰當時、ほとんど單獨孤立の地位に陥つたドイツは、世界の二十六ヶ國を相手に戦ひ、しかも四ヶ年三ヶ月の長きに互つてこれを持ち耐へた。ヴェルサイユ條約の桎梏を受けて、まつたく四肢の自由を奪はれたドイツが、過去二十ヶ年に互る惡戰苦闘の跡は、これを涙なくして見ることの出來ないものであつた。あらゆる災厄を忍び、あらゆる犠牲に堪へ、

盟友ドイツ人の粘り強さ

あらゆる苦難を凌いで、あくまで初一念を貫き徹すドイツ人の粘り強さは、現在の吾人にとつて、ほとんど無限の教訓を與へるものだ。

過去のドイツ人は、現在のドイツ人よりも、より一層粘り強かつたかも知れぬ。吾人は三十年戦争を知つてゐる。七年戦争を知つてゐる。

三十年戦争のドイツは、當時のヨーロッパの強國中、ほとんどそのすべてを敵として戦ひ、國土の大半は、擧げて戰場となつた。三十年間の慘憺たる戦争の後、多くの都市は滅び、住民は流亡し、三千萬の人口は、わづかに千二百萬に減り、エルベ河畔の豊饒な田園は、一望離々たる草原と化し、白骨累々として路に横はつてゐても、これを收める人さへないといふ様になつた。しかもドイツは再起した。再起したドイツは、新らしくフレデリック大王のプロシアとして現れた。

フレデリック大王のプロシアは、またもやヨーロッパのすべての強國を敵として戦つた。オーストリーと戦ひ、ロシアと戦ひ、フランスと戦ひ、スペイン

三十年戦争後のドイツ

最後の勝
利者

と戦ひ、ドイツ聯邦の大部分と戦つた。戦争は七ケ年間繼續し、國家は疲弊の極に陥つたが、しかも彼は屈しなかつた。戦争が終つた後、時人はこれを評して、フレデリックは勝つたが、プロシアは滅んだといつた。その滅んだと思つたプロシアの中から、新しくウキルヘルム大帝の大ドイツ帝國が生れたのだ！吾人は、粘り強いドイツ人の盟友として、それに劣らないだけの粘り強さを發揮しなければならぬ。一切の弱氣を棄て、一切の悲觀を忘れ、一切の懷疑を絶ち、ただ只管に粘り強く戦ひさへすれば、吾人は必ずや勝つに相違ない。従つて、たとへ如何なる場合に出會はさうと、吾人は絶対に躊躇してはならぬ。逡巡してはならぬ。狐疑してはならぬ。自分のなすべき所作に迷うて、あてどもなくうろろしてゐるやうなことは、到底最後の勝利者とはなれない。これだけの肚が出来、これだけの行ひさへ出来れば、もう矢でも鐵砲でも來いだ！

アメリカのアドミラルが何と喚かうと、アメリカの海軍長官が何と叫ぼうと、

彼等の子供じみたこけおどかしぐらゐに參つて、すぐおぞ毛を振ふやうな日本人ではなくなつて來る。詩人山陽は相模太郎膽壺の如しと歌つたが、蒙古の使を龍の口で斬つた北條時宗は、七百年の以前、すでにそれだけ心術の工夫が出來てゐた。七百年後の時宗の子孫たちが、その半分の工夫も出來てゐないといふことでは、吾人は吾人の歴史に對してそれを恥ぢなければならぬ。

米國の弱點

さうかといつて、吾人はアメリカを侮つてはならない。

古人は小敵と見て侮る勿れと教へたが、昔から敵を侮つたものが勝つたためしはない。早い話が日露戦争におけるロシアはどうであつたか。戦争の勃發する直前、東京を訪れたロシアの陸軍大臣クロバトキンは、接伴官たる寺内中將に對して、無禮千萬にも日露戦争を口にし、若し兩國間に戦争が勃發するやう

アメリカ
を侮る勿

なことがあつたら、予は五十萬の大軍を率ゐて東京を占領し、ここで閣下とともに講和條件を議するであらうなどといつて置きながら、本當に戦争が勃發して見ると、退却また退却の連続で、終に退却將軍の名をもつて呼ばれるやうなことにさへなつた。つい一二年前の言動を顧ると、穴があつたら這入りたいたいふのは、おそらく戦後のクロバトキンが経験した心境であらう。

オースト
リーの
前例

前の歐洲大戦も、老大國オーストリーが、柄にもなくセルビアを輕侮し、これを小敵と見て馬鹿にしたから起つたことだ。

ところが、本物の戦争が起つた後の有様はどうであつたか。ドナウ河一つ中に挟んで、はじめには一寸向うに渡つたが、すぐ追ひかへされ、つぎには頭からこれを渡ることが出来ず、三度目には渡ることも渡り、相當奥深くセルビアの國內に進出することが出来たのに、またもや決然奮起したセルビア軍のために追ひまくられ、ほとんど命からがらの状態で自國の領土内に逃げ歸つた。堂堂たる埃匈大帝國の大軍が、廣表わづかに十分の一にも足りない小王國の軍隊

強大國ア
メリカ

を敵として、これだけ恥曝しの負け方をしたといふのも、一つにはオーストリーがこれを小敵と見て侮つてかかつたからだ。

アメリカは、明かにセルビアではない。廣表三百七十四萬方哩、人口一億三千萬、富源は世界の半ばを獨占し、金は世界の四分の三を集め、その海軍は世界第一の地位に居り、その戦略的地位は難攻不落の實を備へてゐるといふ國だ。アキレスの力を有ち、クロイツスの富を蓄へ、しかも無比の天險に據つてゐる點では、古代のローマ帝國や蒙古帝國などをもつて來ても、到底今のアメリカには及ぶまい。かかる國を敵として戦ふ以上、吾人は何でこれを見送つてかかることが出来よう。小敵尙ほ侮るべからず、況んや大敵をやだ。

アメリカと戦ふ場合、相手がたとへすこしぐらゐへまを演じようとも、吾人は聊かもこれに氣を許してはならぬ。現在のアメリカ艦隊を撃破し、これを一艦一艇の末に至るまで海底に葬つたところで、大西洋および太平洋の兩海岸にあるアメリカの造船所では、また現在のそれに劣らないほどの大艦隊が建造さ

れつつある。わづか一年足らずの前、三百五十隻から成るローマ艦隊は、メルクリー岬角で暴風に遭ひ、すべて全滅の厄に逢つたと思つて欣んでゐたカルタゴ人は、間もなく彼等の眼前に出現した三百隻の大艦隊を見て、それを單なる幻影ではないかと疑つた。いかなる點においても、吾人は斷じてカルタゴ人の過失を再びしてはならない。

それと同時に、吾人は夢にもアメリカを怖れてはならぬ。

アメリカの得意とするところは、徹頭徹尾その尨大な數字にある。吾人は時として尨大な數字を羨望するが、幾ら尨大な數字を並べ立てて見ても、それで戦争に勝てるといふわけではない。もし數字そのものに萬能力があるとしたら、四百萬人の陸軍と、千二百隻の海軍とから編成されたといふクセルクセスの進軍は、なぜテレモビレおよびサラミスにおいて無残な敗戦を喫したのか！

剛勇無敵と稱せられたアキレスにも、やはりその踵はあつた。富強世界に冠たりと稱せられるアメリカのみが、何でその踵がないと言ひ得られるであらう。

アメリカ
を怖れて
はならぬ

アメリカ
の踵

アメリカはセルビアではない。しかし、それと同時に、アキレスでもない。本當にアメリカの本質を見徹してゐるものの眼には、わづか一つや二つの踵どころか、無数の踵が、——それこそ尨大な數字をもつてのみ表現しえられる無数の踵が、明かにアメリカの本質を形作つてゐることを承知してゐるであらう。日本が、よくこれを知り、しかもこれに乗ずる手段と方法とさへ心得てゐたら、日本は毫もアメリカを怖れる理由はない。

日本はかつて蒙古を倒した。そして近くロシアを倒した。蒙古を倒した時代の日本は、いまだ集團戦法さへ知らなかつた。ロシアを倒した時代の日本は、辛くも近代戦法の一斑に通じてゐるに過ぎなかつた。現在唯今の日本はどうか。陸に世界第一の強兵を擁し、海に世界第一の堅艦を備へてゐる。七百年前の祖先がよくこれをなし、三十六年前の先輩がよくこれをなしたところを、今の吾人が何でなしえられないといふ理由があるか。光輝に充ちた二千六百年の歴史は、強國アメリカに對して、吾人が果して如何に戦ふかを監視してゐる。

實戰の経験においては、吾人は毫もその乏しきを憂へる必要はない。明治維新以後、吾人は平和を楽しんだ日よりも、むしろ戦争に従事した日の方が多かつたかも知れぬ。

吾人は臺灣において戦つた。朝鮮において戦つた。滿洲において戦つた。シベリアにおいて戦つた。黄海において戦つた。旅順口において戦つた。對馬沖において戦つた。青島において戦つた。蔚山沖において戦つた。張鼓峯において戦つた。ノモンハンにおいて戦つた。そして、百萬の皇軍は、今支那の廣漠たる平野において戦ひ、北は蒙古の沙漠から、南は海南島の熱帯林に至るまで、處としてその戦跡を残さざるなしといふ有様だ。

然るに、當の敵手たるアメリカはどうか。ノックス海軍長官は、アメリカは戦つて未だ負けたことはないといつてゐる。なるほど、アメリカは未だ負けたことはない。スペインと戦つても勝つた。メキシコと戦つても勝つた。多くのアメリカ・インディアン族と戦つても勝つた。確かに勝つことは勝つたに相違

ないが、その勝つた相手方といふのが、餘りにも弱蟲揃ひで、眞面目に勝名乗を擧げるには、聊か氣が退けるといふだけのことだ。吾人がかくいふと、ノックス海軍長官は、慌てて吾人の口を塞ぎ、でも吾人は英國やドイツと戦つて勝つたではないかといふかも知れないが、一八一二年の英國との戦争は、ただ負けなかつたといふだけのことだし、一九一八年のサン・ミエールの一戦は、既に崩壊に瀕してゐた敵手に對し、ほんの戦争の眞似事をして見たといふに過ぎない。

殊に、近代的な海戦に對する経験といつては、唯一の米西戦争以外、他にこれといふ経験を有たない。その米西戦争においてさへ、規模きはめて小なるマニラおよびサンチャゴの二海戦を戦つたに過ぎないから、アメリカ現代の提督たちは、ひたすら外國の海戦史を研究することと、出来るだけ平素の戦技訓練や演習などに精進することとによつて、辛くも實戰に對する知識と自信とを贏ちえてゐるといふ有様だ。従つて、彼等が如何に怪氣焰をあげて見たところで、その怪氣焰の由つて来る所以たるや、頗る心細いもので、今更これを眞面目に

吾人に必
勝の算あ
り

受取つて議論をするといふこと自體が、すでに滑稽千萬だ。

しかし、向うのことは向うに委せて置けばいい。吾人はあくまで不敗の地位に立つて、しかも必勝の策を講じ、斷じてアメリカの武力に屈せざる意氣込みをもつて戦ふだけのことだ。あらゆる災厄を忍び、あらゆる犠牲に堪へ、あらゆる苦難を凌ぎ、最後の勝利を得ないかぎりには、斷じて戈を收めずといふ粘り強さをもつて戦ふだけのことだ。

従つて、吾人は敢ていふ。——吾人は必ずや克つ！ 石にかじりついても必ずや克つ！

——了——



日米戦争

昭和十六年二月四日印刷
昭和十六年二月七日發行
昭和十六年二月十二日第二刷
昭和十六年二月二十日第三刷

〔外地定價壹圓五拾四錢〕

著作者 池崎 忠孝

東京市牛込區矢來町七十一番地

發行兼印刷者 佐藤 義亮

東京市小石川區西江戸川町

印刷所 富士印刷株式會社

東京市牛込區矢來町

發行所 新潮社

電話牛込

(長)
八八八八八
〇〇〇〇〇
九八七六五
番番番番番

振替東京八〇八番

石澤 豊著 在バタビヤ 帝國總領事

蘭印現状讀本

規格B六判 價壹圓四拾錢
寫眞豊富 (送料十錢)

永田安吉著 前ハノイ 帝國總領事

佛印現状讀本

規格B六判 價壹圓四拾錢
寫眞豊富 (送料十錢)

尾崎士郎著 價一・七〇

成吉思汗

曠世の英雄成吉思汗の若き日を描いた大文學。

坪田讓治編 價一・五〇

父は戦に 統後兒童 綴方集

今事變勇士の子弟たちの赤誠籠つた綴方集。

今や太平洋問題の焦點として全世界の注目を惹く蘭印の資源を初め、天然、氣候、軍備、産業、風俗、宗教等々其他あらゆる部面に互つて詳細に、明快に、且つ面白く説いたのが此の書である。

蘭印の状況は過去現在に因り將來への豫想まで剩さず語り盡された。まさに蘭印百科全書である。

皇軍は遂に佛印に進駐し、目下東京に於て日佛會談が開かれてゐる。この時佛印の如何なるを知るは刻下の急務である。著者は、ハノイに在ること四年、以て本書が他を歴する權威書である事が分る。

佛印の資源はもとより、地勢、軍備、風俗に至るあらゆる部門に於ても他書に一步を先んずるは多言を要しまい。

黒田禮二著 (價一・五〇) (送料十錢)

躍進ドイツ讀本

高度國防國家の完遂を急ぐ日本全國民の必ず讀まねばならぬ書。
敗戦のドン底から立ち上つた現代ドイツの躍進を、あらゆる觀點から描いて高揚せる民族の魂の奥に潜めるものを掘んだ書。何等豫備知識のない讀者にもドイツの真相を分らせ、また世の所謂ドイツ通の人々をも啓蒙する事深いものがある。

黒田禮二著 (價一・六〇) (送料十錢)

總統ヒットラー

豊富なる材料を鑑見直拔の著者が自由に驅使した新ヒットラー傳！
一伍長より身を起し、遂にコンピエーニユの森に世紀の凱歌を奏する迄のヒットラーを、在國十數年、ヒットラーに數回面談の記録を持つ著者が、不世出の巨人に對する畏敬と情熱とをこめて成せる新ヒットラー傳である。

トングーユ・アラトヒ

前ナチス東京支部長 ヤーコブ・ザール 高橋健二著

寫眞と解説

ヒットラー・ユーゲントとは何か？ 本書はその若々しい飛躍のさまを、種々の角度から映し出した寫眞によつて明示し、解説と相俟つて、その全貌を明かにした。

本書こそは新體制下日本の青少年運動に示唆するところ多い好著である。

掲載寫眞百七十面

ドイツ青少年團本部の直接提供せるもの、日本で初めての發表

規格B六判 價一・六〇 (送料十錢)

新傳記叢書

冊一
圖壹

ヘスタロツチ 田中著

畏敬すべき教育學の天才の尊き生涯が、平易に、しかも感銘深く展開された。(著者は文壇・文壇大教授)

ミケランジェロ 板垣著

数々の驚嘆すべき作品は如何にして成つたか。不出世の天才の多難にして尊き努力の一生を見よ。

ツエツペリン 限部著

はじめて硬式飛行船に着手した彼はいかに多くの困難と障害とを突破したか。(著者は工師・偉大助教授)

アムンゼン 山本著

著者は全額的情熱と多年蒐集の資材を傾けてこの偉人の壯舉と全面目を語つた。(著者は理博・三高教授)

パスツール 林著

細菌発見といふ偉大な事實を成して人類を傳染病の暗黒から救つた生涯を叙す(著者は醫博・慶大助教授)

事變下國民の生活讀本

●生きる力

●向上の道

●明るい生活

定價各 50

新體制の理論や定義は飽きる程讀んだり聴いたりしたが、それより簡單明瞭で實行し易い此の書が第一である。(今村力三郎氏)

厚生省保險院編 價一・〇〇

▼結核は必ず癒る

三浦逸雄著(厚生省屬託)價一・三〇

▼新體制の職業讀本

UNCLASSIFIED

DEPARTMENT OF THE ARMY
THE ADJUTANT GENERAL'S OFFICE
WASHINGTON



DEPARTMENTAL RECORDS BRANCH, T.A.G.O.

UNCLASSIFIED